

---

# 幼馴染との恋は無理ですか？

日向莉子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼馴染との恋は無理ですか？

### 【Zコード】

Z7607X

### 【作者名】

日向莉子

### 【あらすじ】

高校1年生になった石川雪と雪の幼馴染、松田隆矢が繰り広げていくラブストーリー。雪は隆矢に好きな人を作つてあげようという野望を抱いていく。だがそんな雪の野望を邪魔するものが・・・。そして、自分のために一生懸命になる雪を好きになつていく隆矢。隆矢の思いは届くのだろうか・・・。

## 第1話 高校生になりました

私は、市内の学校に通う高校一年生の石川雪<sup>いしかわゆき</sup>。私には、私の隣に住んでいる幼馴染がいます。性別は男で身長は180センチメートルという意外と大男。名前は・・・

「松田隆矢<sup>まつだりゅうや</sup>」

「はい！」

隆矢は、新入生の代表として新入生からの一言を話すことになつていた。

私の幼馴染の隆矢は、小さい頃からとても元気な子で、周りからとても親しまれていた。

隆矢はクラス・・・学校の多々が知つてゐるくらい有名だった。そんな隆矢の幼馴染の私も、もちろん隆矢のせいで名前が少々知られていた。他のクラスの女子達から隆矢のことをいろいろ聞かれたりもした。

一番良く聞かれたのは“石川さんって隆<sup>じゅう</sup>と付き合つてるんですか？”だ（隆矢はニックネームとして皆から“隆<sup>じゅう</sup>”と呼ばれている）。という質問に私は即答で“付き合つてるわけないじやん”と答え続けてきて、もう16年（まだ16歳になつてないけど）。

そして私の新しい高校生活はスタートした。

「おーい、ゆきー」

「あ、隆矢。演説というか・・・まあ、上手に話せてたね！隆矢にしては、あははは」

そんな話をしながら、私と隆矢は指定された教室に向かつた。

私と隆矢はクラスが一緒だった。ちなみに小学生の時からずっと一緒にクラスだった。

担任の先生が生徒が着席したことを確認し、教卓の前に立つた。

「起立、礼」

「お願いします」

「着席」

いつも通りの流れだった。中学の時と何ら変わりない高校生活になるだろうと思った。

「えーっと、貴方達の担任をすることになつた、西口小枝子よ。一ツシーツ呼んでね！」

「よひしく、ニッシー！」と隆矢。

この時私は、さすが隆矢だなと思った。中学の時もそうだった。隆矢が突つ走つてリーダーのような存在になつていて。いつの間にか、隆矢のペースに乗つていついていた。

「さて、ホームルームということで、自己紹介をしましよう！」でわでわ、そここの貴方から！」

そして自己紹介タイムが始まつた。恒例行事のようだ。

次々に生徒達が自己紹介をしていく。

「えー、俺の名前は松田隆矢。みんなから隆つて呼ばれてて・・・まあ、どうとでも呼びなさい！」

「あははは、やっぱ隆おもれー」「個性的なキャラだねー」「よろしくー、仲良くしようねー」とクラスメイト。次は、私か・・・。

「私の名前は、石川雪です。みんなと仲良くしたいので、いっぽい話しましょー！よろしくー！」

中学の時と変わらないフレーズ。自己紹介ってなぜか面倒くさい気がする。

全員の自己紹介が終わり、ちょうどホームルームの終わりが近づいていた。

「でーは、終わりますかー」といつか、次桜の前で記念撮影撮りますよ！校庭に集合ー！」

そして、チャイムが鳴り、号令が掛かつた。

さつそく、いろんな人が隆矢の前に集まつていた。

「石川さん！」

「は、はい」

いきなり名前を呼ばれ、驚く私。見たことない顔の子だった。

「私たちと友達になつてください！」

「・・・あははは、もちろん！深刻な顔だつたから何かと思つちや

つた

「ええ、そんな深刻だつたかな・・・でもよかつた～！雪つて呼んでいいかな？」

「うん」

そうして、新しい友達ができた。ボブヘアの倉梨莉奈。<sup>くらりなしほな</sup>“リナポン”といいうーヶクネームで呼ぶことにした。

「ねえ、ゆ、雪」

「ん？ どうしたの？」

まだ私の名前をきこひなく呼ぶリナポン。

「雪と松田君つて付き合つてるの？」

キ、キター！ 聞かれるとは思つたが、こんなに早く・・・。

「いやいや付き合つてないよ、どうして？」

「だつてさ、わつわすつ」と仲良さそうに話してたからさ・・・

「あー、私と隆矢は幼馴染なの。隣の家の幼馴染みたいな？」

「そーなんだ！ だからか～」

リナポンはなるほどと言わんばかりに頷いていた。

私たちのクラス（1年C組）は、先生が言つていていたよつて記念撮影をするため校舎に出た。

「ほらほらちゃんと並んで！」

ここはやっぱり背の順。私は154センチメートル、小さい方だ。

それに比べて隆矢は一番最後。私と正反対だ。

「撮りますよー」

そして、カメラのシャッターを切る音が校舎に鳴り響いた。

3枚くらい撮り、記念撮影は終了。そしてこれで下校。入学式の下校は早い。

「ゆきー、帰るー！」

「うん！ まあ、途中までだけだ

「雪は家どこ?」

「えっと、駅の近くかな……リナポンは電車乗つて帰るんだよね  
!駅まで送るよ」

そうして、私とリナポンは一緒に下校した。

リナポンの家は電車に乗つて3つ田の駅。

あつという間に駅についてしまつた。今日はいろいろ話題がたくさんあつた。

「じゃあ、また明日ね!」

「うん、あー!リナポン!明日8時ここで待つてる!一緒に行こうね!」

そういうとリナポンは、半泣きになつていた。

「え!?だ、だめだつた?」「ごめんね」

「いや、わ、私……めっちゃ嬉しいです!雪様!」

ゆ、雪様!?

やつぱり友達がいるつて楽しくて幸せなことだ。  
こんなことで喜んでくれるなんて……。

「じゃあ、また明日!」

そういうつて私とリナポンは背を向けて家に帰つていつた。

すると前方から隆矢の姿が見えた。

「あ、隆矢」

「おう、雪!おつかえり!」

小中学生とこの件をしてきたけど、さすがに飽きてくる。

「意外と学校から近くでよかつたよね」

「まあ、これつてエスカレート式つていうんだつけ?便利だよなー」「エスカレーター式ね……そういうえば、隆矢、高校生になつたん

だから彼女作るんでしょ?」

单刀直入に聞きすぎたのか、いきなり隆矢の顔が困り果てた。

「ん……俺、彼女作らないことにした……」

隆矢はもてる。女には困らない。それに意外とイケメン?私が言つのもなんですが・・・。

「どうして作らないの?」

「まあ、いろいろあんだよ!男には!じゃあな」

そういうて隆矢は逃げるかのよう家に入つていつた。

中学の時も隆矢は同じことを言つた。

私には理解が出来ない。いい女は寄つて集つてくるのにどうして好きな人すらできないのだろうか。

私はそんな隆矢に絶対好きな人を作らせて見せると自分に誓つた。

## 第2話 宿泊研修1

朝の8時。

私は高校で出来た友達、リナポンと一緒に学校へ登校していた。

「あ、ゆーきー！おはよう

「おはよう、リナポン」

入学式の次の日からずっと私とリナポンは登校していた。

そうしているうちにリナポンは私と気軽に話せるようになっていた。

「そういえばさ、あと少しで宿泊研修だよねー！」

「あー、そういえばだね・・・でもさ、あれ自分達でご飯作つたりするんだよね？」

「うん、そうだよ

自分でご飯を作る・・・。

私はもう高校生になつたといつのに未だにまともな料理を作つたことがない。

中学生の時の家庭科は班員全員が私にいろんなことを教えてくれたからまだマシな料理を作っていたが・・・。高校生になつても料理の一つや二つも作れないなんて・・・、それに私は女の子なのに。「それにさ、これをきつかけに話したことない人とかと話せるチャンスだし！」

そうだ。これをきつかけに好きな人も・・・。

私は隆矢のために隆矢の好みっぽい人をこの宿泊研修で見つけて見せると自分に宣言した。

学校に着いた私たちは靴を履き替えていた。

「あ、松田君と富口君！おはよう

隆矢は入学式の日に富口拓海みやぐちたくみという友達を作つていた。

「はよ、あー、雪もいたんだ・・・小さくて見えねーぞ」

「うつむこー富口君おはよー、こんなやつと絡んでたら頭やられち

やうから氣をつけてね」

そういうとリナポンと富口君は、私と隆矢の口喧嘩を見て笑つていた。

「こういう喧嘩は日常的だ。毎日しているといつても過言ではなかつた。

私たちは教室に入ろうとした。隆矢が戸を開けようとする、先に戸が開き、誰かが隆矢とぶつかった。

「うお」

隆矢は驚きの声を出した。ぶつかってきたのはクラスの女子、川本かわも知恵ちえ。

「「「、「めんなさい！」」」

「いや、別にいいけど・・・大丈夫？」

「は、はい！す、すみませんでした！」

そういうと彼女は走つてどこかへ去つていつてしまつた。

私の目がおかしくなれば、知恵の顔はとても赤くなつていた。

もしかすると知恵は隆矢のことが・・・？

私たちはそれぞれの席に座つた。そして私は前の席の隆矢の肩を

トントンと叩いた。

「・・・なんだよ」

「いや、やっぱ隆矢は乙女心が分からぬのか・・・って思つて！ねえ、今度宿泊研修あるじゃん。その時にさ、隆矢彼女作つたら？」

「・・・は？お前、頭大丈夫？つてか昨日の聞いた？俺、彼女は作んないつて言つたんですけど？」

「だから？」

「だ、だからじゃねーよ、まあ男にはいろいろあんだつて！」

そういうと隆矢は席を立ち、富口君のところへ向かつた。

私にも男心が分からぬように隆矢も乙女心が分からぬのはわかる。だけど彼女を作らない理由がわからない。高校受かったあの時、隆矢は確かに『高校生になつたら絶対彼女作つてやる』つて宣言し

ていたのだが・・・。そんな急に心が変わるのは思えない。

そして、チャイムがなつた。

先生が教室に入り、教卓の前に立つた。

「きりーつ、礼」

そして、今日の一日が始まった。

私は今日の一日、ずっと隆矢のタイプを想像していた。

古文を読んでいるときも、体育をしているときも、理科の勉強をしている時も・・・。ずっと！そして今、宿泊研修の話をしている時も！

「・・・それでは実行委員を決めたいと思います」

ついに宿泊研修の係決めをする時間になつた。

「はいはーい、俺、隆・・・じやなくて松田君を推薦しまーす！」

「はー？ てめつ」

「でわ、松田君でいいと思う人拍手」

そして誰もやる気はないので、みんな拍手した。もちろん私も拍手した。

「ちょ、何勝手に！ 拓海、後で覚えとけ～！」

「あー、怖い怖い

隆矢は面倒くさいとか言つているが、本当は真面目にしている。

中学の時も三年の修学旅行の実行委員になつたが、ちゃんとやり遂げていた。

「でわ次、副実行委員は・・・」

すると一人手が上がつた。それは川本知恵だった。

「お、川本さん積極的でいいわね～。では川本さんでいい人は拍手

！」

もちろん皆拍手をする。そして拍手が鳴り止んだ後、周りの女子が知恵のことをニヤニヤしながら見ていた。私はこの時閃いた。もしかすると知恵は隆矢のことが好きかもしないと・・・。朝も隆矢にぶつかって赤面になつていた。私は知恵に協力しようと自分に宣

言した。

「そう、この宿泊研修を利用して・・・。

「でわ、二人仕切つてちょうどだい」

そして隆矢と知恵が教卓の前に出た。

係はどんどん決まっていき、私はなぜか料理をする係になつていた。

「どうしよう、リナポン！ わ、私・・・料理できないよ〜」

「大丈夫だつて！ 私も同じ班だから手伝うよ！」

「ありがとー」

リナポンがいなかつたら私はきっと何もできないままだつただろう。それに私は過去にいろいろやらかしてきた。そう、こういう良く見慣れない街のところへ行くと必ず迷子になるのだ。そして何かと事件が起る。私がいるともしかすると迷惑が掛かるかもしれない・・・。だけど、今回もこんなことで引き下がつてはならない！なぜなら、隆矢に好きな人を作らせると決めたから！ そして知恵の恋が実るよう協力もしなければ！

私はホームルームが終わる頃にはポジティブになつっていた。

チャイムがなり、一応宿泊研修の係決めは終わつた。

「よし！ リナポン帰ろう！」

「うん、なんか雪テンション上がつてるね」

「うん！ あのね・・・」

帰り道、私はリナポンに今回の作戦を全て話した。

「おお、雪すごいね・・・人思いなのはいいけど、雪は？」

「へ？」

「好きな人、作らないの？」

「そういえばそうだ。そんなこと考えていなかつた。隆矢と知恵のことで頭がいっぱいだつた。」

「んー、作る気ない・・・つてかステキな人がいない！」

「なるほどね」

そして、リナポンを改札口まで送り、私は家に帰つた。家に帰るま

でずっと自分のことも考えながら隆矢と知恵のことを考えていた。

### 第3話 宿泊研修2

宿泊研修当日。

とひどいこの日がやつてきました。私にとつて不幸であり、ドキドキワクワクさせるイベントもある。もしかすると隆矢と知恵が付き合つかもしれないのだから。

私は大きな荷物を肩に背負つて家を出た。すると隣からも玄関が閉まる音がした。

「あ、隆矢！ おっはよー」

「はよ・・・朝からなんでそんな元氣いいんだよ」

「まあね～」

私は隆矢に駆け寄つた。

「今回、この宿泊研修で絶対隆矢は好きな人が出来る！ 私が宣言します！」

「は？ お前バカ？ ってかどけて、拓海が待つてるから」

そういうつて隆矢は私に背を向けて大股で学校へ向かつていった。私もリナポンが待つ駅に向かつた。

駅に着くと既にリナポンは着ていた。

「あ、雪ー！ おはよう」

「おつはよー、この日を待ちに待つていたよ、うんうん」

私はテンションが上がり、独り言のようペラペラと今日起りそつな出来事を話していた。

学校へ着くと既に大型バスが来ていた。

バスの周りにはたくさん的一年生が集まつていた。私とリナポンもその場へ駆け寄つて行つた。既に隆矢たちも着ていた。

集合時間がきて、クラスごとに並んだ。

「全員揃つた？」

「一年C組はオッケーでーす」

実行委員の隆矢がクラスの人数を数えて担任に報告した。そして一

年C組はバスに乗り込んだ。

「でわ、出発します！」

そしてバスは動き始めた。私はバスが嫌いだった。いや、車も嫌いだ。なぜかというと酔つてしまつたのだ。この揺れ、この独特な臭い。これだけで私は酔つてしまつたのだ。

数分後・・・

「雪？大丈夫？酔つた？」

「き、気持ち悪い・・・」

一番前の席に座らせて貰つていても関わらず、もう酔つてしまつた。もしこれで隣にリナポンがいなかつたらと考へると、もし隣が見知らぬ人だつたらと思うと、余計に気持ち悪くなる。

「ちょっと・・・寝るね」

「う、うん。着いたら起こすね」

そうして私は眠りに着いた。寝ていて酔つていての感覚も無くなるのだ。

眠りに着いた私は、夢を見ていた。

料理が上手くいかず、隆矢と知恵の恋も実らず、逆にもつと距離を開けてしまつた。

「・・・き、ゆーきー、着いたよー」

すると夢から覚め、リナポンに呼び起こされた。

「あ、おはようリナポン」

時間を確認するとちょうど十一時だつた。日程は、まだ高校入つたばかりなので校歌を歌い、覚えるのを今から行うことになつていて、「でわ、皆さんバスが着いたのでちやつちやつと降りちやつてね」

そうして担任のニッシーが声を掛け、生徒達（一年C組の人達）はバスから降りた。

よく分からぬ建物が私たちの前に合つた。でもまあ、これから校歌を歌うのだから広い部屋とかがあるのだろうと予想はついていた。もちろん広い部屋だつた。宿泊研修で校歌を歌うなんてあんまり聞いたことが無い。それに宿泊研修なのに校歌を熱唱なんて恥ずか

し過ぎる。私はそう思つた。

「でわでわ、歌集を取り出して校歌のページを出してください」

生徒が並んでいる前には、CDラジカセが置かれてあつた。これで校歌のメロディーを流そうといつ魂胆であろう。そして先生は生徒全員が歌集を取り出したことを確認し、再生ボタンを押した。

すると予想通り、校歌のメロディーが流れた。

当たり前のように最初はみんな歌えるはずが無かつた。入学式の時、一度だけ在校生が歌つていたあの時しか、この高校の校歌を聴いた事が無いのだ。先生はアホなのだろうか。

「はーい、もう一度！」

そして何回か繰り返し歌つていると、十一時が来た。そろそろお昼の時間だ。十一時半にはここを出て次の目的場所へ行かなければならなかつた。果たして、間に合つのだらうか。

「は、早くお弁当食べてバスへ乗り込むわよ！」

先生がこんな時間までやつているから余裕を持てないのだ、と思う。生徒達は急いで弁当を平らげ、バスへ乗り込んだ。乗り込んだ時間は十一時三十三分。微妙に遅れてしまった。そしてバスは出発した。「ニッシー、もつちよい計画的に行こうぜ！」

「そ、そうね・・・でも計画通りに動いているんだけどね・・・まあ、確かに計画通りに間違いない。ということはこれを計画した人がアホなのか。

そして次は講演を一時間ほど聞いた後、ついに野外炊事だ。

講演は一時からで、野外炊事は移動距離も含めて、二時半からとなつてゐる。

「雪、やばい・・・眠たい・・・」

「わ、私もだよ・・・この講演眠りの呪文のようだよ・・・」

講演がして数分後。何人かの生徒が眠りにつき始めた。私もその中の一人である。

いつの間にか講演は終わつていた。

ほとんどの人が眠りに睡りに着いていて、バスの中で先生に叱られてしま

つた。そしてついにきた野外炊事の時間ですね。

「はあああああああ」・・・

「深い溜息だね。だ、大丈夫！私も手伝つからぞー。」

「うん・・・・リナポン大好き」

そういうつて私はリナポンに抱き付いた。

まずは材料とそれぞれの班にまな板や包丁を用意しなければならない。準備がだいたい整い、ついについに食材を切るときが来た。

私は右手に包丁を持ち、食材を切つていく。

「雪、その持ち方だつたら指切っちゃ・・・

「あああああああ！指切つたー！」

人差し指をざつくり切つてしまつた。幸いなことに人差し指が無くなるまではいかないが。人差し指の先っぽから血が溢れ出して来る。

「先生に絆創膏貰いに行こう」

そういうつて私はリナポンに連れられ、先生に絆創膏を貰いに行つた。

「はい、これで大丈夫！」

「ありがとうございます・・・」

完全に私は落ち込んでいた。こんなことが起るのではないかと・・・。すると隆矢と知恵がこちらに駆け寄つてきた。なんだかラブラブのカップルに見えてくる。

「あれ、雪、どうしたんだ？あー・・・指切つたか。あ、ニッシー野外炊事の後の予定のことなんだけどさー・・・」

もちろん隆矢は私が料理を作れないことを知つてゐる。すると私の視界に知恵の悲しそうな表情が映つた。私は何をしているんだと思った。知恵に協力するはづが、私が隆矢と話しているせいで変な誤解を招いているような気がする。

よし野外炊事のとき一人をなんとしてでも近くで食べさせないと。

「ねえねえ、隆矢と知恵」

「あ？何？」「何？雪ちゃん」

「ニッシー頼りないからさ、野外炊事の食べる時、一人で計画立ててみたら？だから、一人きりで隣同士で座つて、計画する・・・

みたいな？」

すると知恵の顔がだんだんと赤面になっていくのが分かつた。私の心は恋模様で染まっている。

「は？ なんでそこ二人にこだわんだよ、川本が俺と一人で食べてたら気まずいだろ・・・」

そういうて隆矢が知恵の顔を見ると知恵は真っ赤な顔でもう林檎だつた。隆矢は感ずいたのだろう。私が考えていたことが・・・。

「お前な・・・わかつたよ、食べりやいんだろ」

「べ、別に無理しなくていいよ。私と食べたくなかつたら食べなくていいいから」

知恵が困り果てている顔をしているが、その後ろで私は隆矢に“断るな”というオーラを放つた。

「いや、別に無理してない。ニッキー対策考えようぜ」

すると知恵の顔は笑顔になり、とつても可愛い笑顔だつた。

そして、次々と時間は経つていった。

## 第4話 宿泊研修3

野外炊事が終わり、私たちは宿泊する場所へ向かった。

野外炊事では、計画通り隆矢と知恵は一緒にご飯を食べた。周りからはカップルのように見られ、隆矢は違うと皆に言い聞かせていたが、知恵はとても嬉しそうに見えて恥ずかしいように見えた。

そして部屋の注意事項のお知らせを聞かされていた。

「雪、一緒に部屋なんだけど・・・朝、先生のところにシート持つていかなくちゃならないんだよねー。雪忙しいなら私行くけど・・・

「私いけるよ。リナポンは布団畳んでてくれるかな？」

「オッケー」

宿泊場の管理人の注意事項のお知らせが言い終わり、私達は各部屋へと移動した。

部屋は四人グループに分かれる事になつていて。私のところは、リナポンと知恵、知恵の友達の咲、そして私の四人だつた。

部屋の中に入ると意外に狭く、ベッドとベッドの間は一メートルくらいの隙間しかなかつた。

「うわ・・・狭すぎ・・・」

さすが宿泊研修というものだ。そう甘くない。中学三年生の時に行つた修学旅行のホテルと比べてしまつた。もちろん修学旅行のホテルと比べ物にならないくらいボロくて狭い。

「本当に狭いね・・・まあ、温泉入つて、寝るだけの少しの間だし・

・・我慢だね・・・」

そういうつてリナポンが一番最初に部屋に入り、電気を点け、辺りを見渡した。殺風景だつた。ベッドと時計しかない。こんな部屋、住みたくない。

「じゃあ、温泉入りに行こつか。早く済ませたほうがいいし

「そうだね、知恵達も行こうよ

「うん」

そうして四人全員で温泉場に向かつた。するとバッタリ隆矢達と会流した。女湯と男湯は隣同士にある。幸い、覗き見されることはない。

「あ、川本、さつきはサンキューな」

「え、あ、いえいえ」

野外炊事で一人が一緒に食べていたことを一年C組の人は皆知っている。だから、私達は空氣を読むため、先に温泉に入ることにした。そう、あの二人を二人きりにするために・・・。

「ねえねえ、やっぱりあの二人いい感じになつたよねー」と咲。

「うんうん、あのままくつついちゃえばいいのにね」

そう私が言うと、リナポンの眉が一瞬ハの字になつた。

「リナポンどうかした?」

「ん? ううん、なんでもない」

そういうてリナポンはにっこりと笑つた。

後から知恵が赤面になつて、風呂場へやつてきた。どんな話をしたのか、知恵からいっぽい話を聞いた。

部屋に戻つてからも恋バナが止むことは無く、先生に注意を受け、私達は就寝した。

翌日。今日は自然を感じに森林へ行くこととなつていた。昼食を食べた後、ピクニックに行くような気分だつた。その場所には、自然公園という名前が付けられていた。入る前に先生から注意事項を言われ、私達は並んで自然を鑑賞していた。

「でわ、ここからは自由行動とします。地図を見ながら、迷子にならないように行動しましょう」

そうして、自由行動となつた。予め地図を渡されており、それを見ながらルートを歩いていった。

私はリナポンと一緒に自然公園を歩いた。自然公園は山みた的なも

ので、道幅が少し広いといつたくらいだつた。周りは緑ばかりだが、天然記念物などの看板などが所々置いてあつた。

「あ、雪！見てみて！これも天然記念物だつて！」

「ほんとだー」

リナポンは天然記念物に興味津々だつた。私は自然の空気をいっぱい吸うことが精一杯だつた。

「雪、あれ・・・松田君達だよ、やつぱあの一人・・・付き合い始めたのかな？」

「え？」

リナポンが指差したところには、隆矢と知恵が一人きりで歩いているところだつた。もう付き合つまでにこぎ付けたのかなどと思ひながら、私とリナポンは二人を観察し始めた。

「なんだか、ワクワクするね！尾行してみたま！」

「あ、リナポン！あれ見て！」

そういうながら私達は二人を尾行し続けた。

帰りのバスに乗り込んだのは五時過ぎだつた。

宿泊研修の最後は、隆矢と知恵の尾行で終わつた。

帰りのバスは皆ぐつすりと寝ていた。私もいつの間にか眠りについていた。

バスが学校についたのは七時だつた。外は真っ暗で肌寒い。

「一人で帰らないこと！不審者が来たら叫んで逃げるのよー！」

「ニッキー心配性だなー、大丈夫だつて！」

「男達はどうでもいいのよ！女の子の皆は気をつけてね」

そうして、一年C組は解散した。私はいつも通りリナポンを駅まで送ることにした。

「リナポン、帰ろう！」

「うん、でも雪、一人になっちゃうよ？それに駅まで来てもらつちやつたら遠回りに・・・」

「大丈夫だつて！駅からすぐだし、このくらい平氣だよ」

リナポンは心配そうな顔をしたが、私は結局リナポンを駅まで送つた。リナポンが電車に乗るまで見送り、私は駅から家に向かつた。

いつものように一人で帰る感覺とは違い、夜に一人で帰るのは心細かつた。

「やつぱ、そのまま帰つてれば……いやいや！」

独り言をブツブツ言いながら、私は早歩きで家に向かつた。すると後ろから誰かが着けてくる様な足音が聞こえた。でもまだ不審者と決まつたわけではない。だが、だんだん近づいてくる。

私は走るうとした。その時、誰かに腕を掴まれた。

「きや！」

「うつせ……俺だ」

良く見てみると、腕を掴んでいたのは隆矢だつた。

「え、隆矢？何してゐの？」つち隆矢と逆方向……もしかして、え！私のこと……」

「ああ、心配で……」

「私のことストーカーしてたの！？な、なんてことを……！」

「は！？なんでそうなんだよ！……もういいから帰るぞ」

そういつて隆矢は私の腕を掴んで歩き始めた。

ストーカーしていたのかもしれない。だけど、隆矢が来てくれて少し楽になつた。

「隆矢……ありがと……」

私がそういうと隆矢は私の頭を軽くグーで叩いた。

「いた！女の子になんてこと……」

「あんま強がんな、お前本当は泣き虫で弱虫で、幼虫のよつな生き物なんだから」

「……それ、悪口だよね……虫虫虫虫つて」

こつやつて隆矢と話していられるのも今のうちだ。隆矢もいつかは知恵のことを好きになつて、私とは一切話さなくなるだろう。私もいつか隆矢から離れなければならない。

「ねえ、知恵と付き合い始めたの？」

「は？ 何いきなり？」

「今日、自然公園のとき一緒に歩いてたから、もう付き合ってるのかな？ つて」

私は隆矢の顔を見ると、隆矢は真剣な顔だった。すると隆矢の足が止まつた。

「なあ、雪

「ん？」

「俺、川本と付き合つてみる」

その時冷たい風が木々を揺らした。

## 第4話 宿泊研修③（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

今後もよろしくお願いします。

ちょっと読みにくかったかな・・・

## 第5話 後悔しますか？

宿泊研修の帰り道、隆矢は私にこう言つた。

“俺、川本と付き合つてみる”と。

「ええええええ！ 雪、それでいいの！？」

「え？ 何が？」

宿泊研修の帰り道のことをリナポンに話すと、目を大きく見開いてビックリされた。

「はあー・・・ 雪は本当に強がりなんだから」

「え？ まあ、強がりつて隆矢にも言われたけど・・・」

「雪さ、松田君にもう一生自分のこと構つてもらえないかも知れないんだよ？」

私はそのことをちゃんと考えていた。一人になつても寂しくないと、そう自分に言い聞かせて・・・。

「別にいいよ、隆矢は私のものじゃないし。隆矢が何しようと私は関係なし！」

そういうとリナポンは溜息をついた。

「まあ、いいわ・・・ 雪がいいなら・・・ 後悔しないようにね！ ジやあ、バイバイ」

リナポンは私に背を向けて電車に乗り込んだ。私はリナポンに手を振り、家に帰つた。

“後悔しないようにね！”

私はリナポンが言つていた言葉が気になつた。後悔なんてしていらない。別に隆矢が知恵と何しようが私には関係ないことだ。

「あ、雪」

前方から隆矢が声を掛けてきた。家が隣だからどうしても顔を見合わせてしまう。私は隆矢を無視して家に入つていつた。

何で無視しちゃつたんだろうって自分でも思う。いつも通り、「隆矢、おかえり」って言えばいいんじゃないのって。そう思いながら

私は家に上がった。

「おかえり、雪」

「ただいま」

家にはお母さんがいた。私には兄弟がない。だから父、母、私の三人家族なのだ。

私はリビングには行かず、すぐ自分の部屋に行つた。すると玄関のチャイムが鳴つた。

「あら、隆矢君。雪ならさつき部屋に・・・」

「え？ 隆矢！？ なぜ！？」

いきなり戸が力強く開いた。

「うわ！」

私はビックリして壁に頭をぶつけた。

「いつたー・・・な、何いきなりつてさつき会つたばっかりじゃん」

「さつきなんで無視したんだよ！」

・・・あー、あの時のことつてさつきの。あれぐらいでまさか訪問していくるとは思つていなかつた。

「え、何怒つてるの？ いつものことじやん、無視とかぞー」

「あれは冗談とかじやなかつた！ まじで無視つた！ 何、俺なんかした？」

なんだか隆矢は真剣に怒つているようだ。顔が怖い。まさかあのくらいでこんなに本気になつて尋ねてきて・・・ありえない。どうしてそこまで？

「別に・・・何もしてないよ。それにもうせ、話しかけてこないでくれる？」

そうだ。隆矢には川本知恵という列記とした彼女がいる。私に構つていたら知恵に誤解されるかもしれない。幼馴染つてだけでも誤解されているかもしれないのに。

「は？ なんで？」

「だつてさ、知恵に誤解されたら困るし！ 隆矢も知恵が隆矢以外の

男子と話してたらヤキモチ焼くでしょ？」

「なあ、雪・・・」

「つてことでもう私の家にも来ないでーーだ、早く出て行つて!」

そういうつて私は隆矢を無理矢理部屋から追い出した。これよかつたんだと、これでみんな幸せになるんだとそう自分に言い聞かせた。

もう隆矢と話さないと決めて一週間が経つた。学校では隆矢と知恵が付き合つていることが広まつていた。下校の時も隆矢は知恵を家まで送つていたりしたらしい。

そして日曜日。噂では今日隆矢と知恵がデートするらしい。私はリナポンから一緒に遊ぼうと誘われていた。久々に履くワンピース。「いっつきまーす」

すると隣からも「いっつきまーす」と聞こえた。もしかすると隆矢・・・?私は急ぎ足で駅に向かつた。学校で隆矢が話しかけてくるせいで、私は隆矢から逃げているように見えていた。

駅に着いた。私はもう一つ遅い電車で乗ろうと思っていたが、隆矢と会うのが嫌だつたので駆け込み乗車になつた。私がギリギリに入り、安心できたと思った。だが、私の後ろから隆矢も乗り込んできた。私はビックリして、隆矢から逃げるようにしてロングシートに座つた。

電車の中は私と隆矢だけだつた。私はこの沈黙の空氣に耐えられず、他の列車に乗り換えることにした。そして立ち上がり、私が歩き出すと隆矢が私の腕を掴んできた。

「ちょっと、離してよ!」

「離さない、なあ雪、逃げるなー十六年間ずっと俺達一緒だつたのに避けられていい気分しねーよ」

私は抵抗をやめた。どうして隆矢は私の気持ちを分かつてくれないのだろう。どうして十六年間も一緒にいたのに私が考えていることを分かつてくれないのでだろう。

「隆矢は何も分かつてない!私が何考えてるか分かんないくせに!」

どうしてだろう、涙が止まらないのは・・・。私は隆矢のことをどう思っているんだろう。リナポンが言っていた“後悔しないようですね！”はこのことなのだろうか。でも・・・

「お前の考えてることなんてわかんないよー。雪だつて俺のことなんも分かつてねーよ！何が話しかけてこないでくれる？だよ、なんなんだよ・・・意味分かんねー」

隆矢は力が抜けたようにロングシートに座った。

あれからずっと沈黙が続き、私はリナポンが待つてこない三つ田の駅で降りた。

“後悔”

私はこの言葉がずつと引っかかっていた。

駅を出るとリナポンが待っていた。

「あ、雪、早くない？ってどした？目が赤いよ？」

「あー、うん・・・ちょっといろいろあって、寝不足かな？あははは」

きっとリナポンは気付いていたはずだ。私がさつきまで泣いていたことを・・・。

私とリナポンは街を歩き回った。そしていつの間にか日が暮れていた。

「あー、もうこんな時間・・・明日も学校だー」

「う、うん・・・」

今日一日中、私の顔はどうなつていただろう。リナポンに心配かけないようにしたつもりだった。だけどリナポンとの関係はどんどん深くなつていつてる。だから、私の思っていること分かつてているかもしれない・・・。

「ねえ、雪。今日何かあつたんでしょう？松田君に何か言われたとか？」

「リナポン・・・」

私はリナポンの胸に飛びついた。リナポンは私の頭を優しく撫でてくれた。

「よしよし

リナポンはとても温かかった。涙が止まらない。やつぱり、正直になればよかつたかもしだい。

私はリナポンにすべてを話した。

「そんなことがあつたんだー・・・やつぱり雪、後悔しちやつたね」「・・・うん、でも隆矢の恋つていうか一人を応援したい気持ちはあるよ。だけど・・・」

「うん、わかる。雪はさ、松田君のことどう思つてるの?」

隆矢のことどう思つているのだろう。

「よくわからない・・・特別だとは思つてるよ。十六年間ずっと一緒にいて特別な存在になつてるのは確かだと思つ・・・だから隆矢に幸せになつてもらいたいつて思つ」

「そつか

そうして話が終わつたのは六時だつた。すっかり暗くなり、リナポンは私を駅まで送つてくれた。

「じゃあ、また明日」

そういうつて私は電車に乗つた。電車に揺られながら、私は隆矢と知恵のことを考えていた。

## 第6話 好きより幸せ

季節はもうすっかり夏になっていた。そして夏休みの前にテストが待ち構えている。私はまあまあ成績も良い。だから中学生のときは隆矢に勉強を教えていた。だけど、今年は教える必要はなさそうだ。今の隆矢には、私より成績のいい知恵という彼女がいるのだから。

テスト一週間前。

「ゆき～、教えて～！これだつたら赤点取っちゃう・・・それで夏休み追試・・・いやだあ～！」

「教える教える、夏休みリナポンと遊びたいもん！」

そうして私は昼休みや放課後、ずっとリナポンと勉強をした。そして同様に隆矢も知恵と一緒に勉強をしていた。

「で、できたー！」

放課後の教室、私はリナポンに出そうな問題をまとめたプリントを渡した。

「お、どれどれ～・・・うんうん、できるよ！」

「やつたー！ちょっと自信ついた！ありがとう、雪！」

リナポンの幸せそうな笑顔を見て、私も嬉しくなった。去年までは、ずっと隆矢と・・・。

廊下から話し声が聞こえてきた。

「あの声・・・知恵と松田君？」

「え・・・」

戸が開いた。リナポンの言う通り、隆矢と知恵だった。隆矢とはあれから一度も話していない。

「あ、雪ちゃんと莉奈ちゃん！」と知恵。

「や、やあ・・・」とリナポン。

私は鞄を持って教室を飛び出した。

「え、雪！？ちょっと待つてよ！」

リナポンも私を追いかけて着いてきた。

「雪！」

我に返った私は足を止めた。もしかすると知恵に不愉快な思いをさせてしまつたかもしれない。そう思った。

「なんか、意識しそぎて……隆矢がいるつて思つたら逃げたくなつちゃうんだよね……」

「雪……」

そして私は駅へ足を運びながら中学生の時の話をした。喧嘩してたときのことも、夏休みのことも、受験で一緒に頑張ったことも……。

「ねえ、雪？ 雪は松田君のことが好きなんじゃないの？」

「好き……？」

私が隆矢のことを？ そんなこと一度も思つたこと無い。いや、もしかすると常に好きだつたのかもしれない。だけどそれがただの特別と思えていただけだつたのかもしれない。

「好きなんだよ！ 雪は松田君が好き！」

「好き……なのかな？ わかんないけど、そういうことで……いや、ノリでこんなことになつてしまつたけれど、本当のところは分からぬ。明日は祝日。この十一日曜日が終わればテスト。明日、私の本当の気持ちを確かめに行くしかない！」

私、石川雪は松田隆矢の家を訪れることを決意いたしました。そして隆矢の玄関の前にいます。

「といつても……何を口実に……」

勉強……を教えてあげるといつても知恵に既に教えて貰つてゐるだろうし……。仲直りするためと言つても、私から言い始めたことだし……。だめだ、やつぱり……。やつぱり家に戻らうとした。

「あれ？ 雪ちゃん？」

「あ、隆矢ママ・・・」

「私は声を掛けてきたのは、ちょうど買い物帰りの隆矢のお母さんだつた。

「うちの玄関の前で何してるの? も、上がって上がって」  
そういわれ私は隆矢ママに家中へ入れられた。入ってしまったと言わんばかりの出来事が起こっている。今の時刻、朝の十時。隆矢ママは買い物を先に済ませておかなければ気が済まないタイプだつた。

「隆矢はまだ起きてないかもね・・・、部屋に入つて待つてあげてくれる?」

「あ、はい」

そうして私は恐る恐る隆矢の部屋に向かつた。一応ノックをする。

「失礼しまーす・・・」

もちろん隆矢はベッドの上で熟睡中。私は寝ている隆矢のそばに座つた。

「・・・可愛い寝顔、久々に見た・・・」

隆矢の寝顔だけは格段に可愛かつた。だから中学生の時、隆矢が起きる前に隆矢の寝顔を見ていた覚えがある。もしかすると犯罪?かもしねない。すると隆矢の目が半開きになつた。

「あ・・・」

隆矢は私がいることに気付き、目を見開いた。

「うわ!」

もちろんビックリするであろう。起きたら目の前に喧嘩していたはずの人がいるのだもの。

「お、おはよう・・・」

「・・・はよ」

久々に口を利いた。なぜか涙が出てきた。

「な、何泣いてんだよ」

私は隆矢に飛びついた。すく温かい・・・。

「ちよ、雪」

「・・・めん、ごめん、隆矢。『ごめんね』

私はそういうて隆矢から一步離れた。そして一步二歩と・・・。すると隆矢が立ち上がった。

「雪、俺さ・・・、昨日、川本と別れた」

「・・・え？」

どういうことだろうか。私の聞き間違いであろうか。

「俺、昨日の帰り道で川本と別れた」

「な、なんで！？あんなにラブラブだつたのになんで！？」

「川本・・・俺の気持ち知つてた。俺に好きな人がいるつて、つてかその人が誰かも知つてた」

頭が回らない。知恵が隆矢に好きな人がいるつて知つて付き合つてたつてこと？というかなぜ隆矢は好きな人いるのに知恵と・・・。そんなんだったら知恵が可愛そうだ。

「つてか正確には振られた？そんな気持ちの松田君と付き合いたくない。本当に私のこと好きになつてくれたとき、また私に告白してくれるかな？つて言われた」

「あらま・・・でもさ、そんな隆矢の好きな人つて分かりやすい人なの？」

「あー・・・、お前には一生分かんねーだろうな」

「ちょっとそれどういう意味！？バカにしてるの！？隆矢より私の方が断然成績いいのに！」

そうしていつの間にか、私と隆矢はいつも通りの関係に戻つていた。隆矢が好きつて気持ちはきっと心の隅にある思いで、多くは特別つていう存在なのかもしれない。私は隆矢が幸せになつてくれればいいと思つていて、ただそれだけなのだと。

「で何しに来たんだ？つてか謝りにきただけ？」

「え、あ、うん・・・」

「それだけのために俺を朝早くに起こすとは・・・」

「あ、あ！じゃあさ、一緒に勉強しようか」

「うわ・・・だる・・・つてか川本に散々教えられました」

それでもそれでもいいから・・・私は隆矢を無理矢理勉強させた。  
今は特別な関係だけでいい。好きとかそんな感情はいらない。た  
だ、隆矢と一緒にいれることができが幸せで、隆矢が幸せになってくれる  
ことが私の幸せにもなっていると思うから。だから今はこのままで  
いいんだってそう思っている。

## 第6話 好きよつ幸せ（後書き）

一つの大きな章が終わった気分ですねー・・・  
これまで読んでいただきありがとうございます。  
引き続き「幼馴染との恋は無理ですか?」をよろしくお願いします。

## 第7話 やつと夏休みになりました

「はじめ！」

とうとう夏休み前のテストが始まった。隆矢とも仲直りをして、中学の時のように一緒に勉強をした。それがとても幸せで、そして今、問題も解決しそうになりました。

テストの終わりを予告するチャイムが鳴った。チャイムが終わるまで私は見直しを何回もした。そしてチャイム終了後、みんなの溜息が教室を包んだ。

「終わったー！」

「あー、だめだ・・・絶対追試だー！」

私はいつも通りの感じだった。よくも悪くも無い。隆矢はどうだったのだろう。まあ、知恵に教えてもらっているのでだいたいは出来ているだろうが・・・。

「でわ、終わります。お疲れ様」

そして最後のテストが終わり、下校することになった。

「ゆつきー、帰ろう！」

「うん、来週が終われば夏休みだねー。あ、テストどうだった？」

「これなら絶対大丈夫だよ！雪が教えてくれたおかげだよー、ありがとう」

リナポンは幸せのオーラいっぱいだった。私もそれをみて少し安心した。これでリナポンと一緒に遊びに行くことができるのだ。こういつてる私が追試になつたら面白いのだけれど・・・。

テストが返ってきて、無事私とリナポンは赤点の科目はなかつた。

「なあ、隆はどうだつたんだ？」

前から隆矢と宮口君が話しているのが聞こえてきた。

「お、俺・・・この点数・・・」

「え！？ 何赤点？・・・ つゆ、 隆が！？ 隆が九十八点！？」

「え！？」

つい驚きのあまり声が出てしまった。隆矢は大はしゃぎをして皆に見せびらかしていた。私でもそんな点数取ったことが無い。というか百点に近い点数なんて・・・。

するとリナポンが私の耳元で小さくこういった。

「よかつたね、松田君追試なくて。夏休み遊びに誘つたら？」

「ちょ、ちょっとリナポン何言つてるの！？ わ、私はリナポンと遊びんだだから！」

「え、 本当は松田君と遊びたいくせに〜」

からかつてくるリナポン。でもよかつた。もしかすると、と思つていたがその心配もいらなかつたようだ。隆矢は隆矢でちゃんと勉強をして成績が上がつたのだ。

隆矢が私の方へやつてきた。

「雪、 ありがと！ お前のおかげ！」

「い、 いや・・・ 知恵のおかげでしょ！ 知恵にもお礼言わないと…」

「おう！」

やつぱり自然に話していることがとても幸せだ。この幸せがいつまで続くかわからない。だけどこの幸せが永遠に続いてくれたらいなと思つていてる。

いつの間にか夏休みに突入していた。宿題もたくさん出され、計画良く宿題をやらなければ終わらない量だつた。突然、携帯電話が鳴つた。私は携帯電話を手に取り、電話に出た。

「はい、 もしもし？」

『あ、 雪？ 莉奈だけど・・・ 来週の日曜日や、 一緒に海行かない？ ついにリナポンと遊ぶ日が来たと思つた。

「行く行く！」

『あ、 松田君達も誘おうよ！』

「え、隆矢も？」

せつかくりナポンと遊べると思ったのに隆矢も入るとどうなる」と  
だか・・・。でもリナポンがこいつているのだから誘つたほうが  
いいのだろうか・・・。

『雪も松田君がいた方がいいでしょ！それに息抜きとしてさー』  
「んー、別にいた方がいいわけじゃないけど・・・まあ、聞いてみ  
るね』

『オッケー、じゃあまた来週！』

電話が切れた。それにしても突然の誘いだつた。私は隆矢を誘おう  
と隆矢の家を覗つた。

「はい？あ、雪。どした？」

「あ、あのね、来週の日曜日に一緒に海行かない？」  
すると隆矢は顔を輝かせた。

「俺と雪のふた・・・」

「富口君も誘つて皆で海へ行こう！」

「は？富口も？」

「うん！リナポンも！それに皆で行つたほうが楽しいでしょ？息抜  
きとして！ね？」

隆矢のさつきの輝いた顔は少し暗くなつたが、気を取り直し隆矢は  
頷いた。そして用件が済み、私は家に帰ろうとした。

「なあ、雪」

「ん？何？」

「花火大会・・・」

花火大会。そういえばそんなものがあつた。この花火大会だけはい  
つも隆矢と行つていた。でも今年はどうだろうか。もしかすると夏  
休み中に隆矢もまた新しい彼女が出来るかもしれないし・・・。

「花火大会、今年どうする？隆矢、もてるからすぐに彼女出来そ  
だからさー・・・、あ！隆矢好きな人いるんだつた。その人といけ  
ばいいじゃん！」

「え、いや・・・好きな人っていうのは・・・」

「だからさ、もし花火大会までに私にも隆矢にもカレカノが出来なかつたら・・・まあ、また今度ね！」

あやふやにしたまま私は家に戻つていった。

宿題をしなければならないという思いもある。だけど海へ早く行きたいという衝動に駆られてしまうのが先だった。とうとう私は限界を超えてしまった。私は宿題を止め、外へでかける準備をした。

「そこらへんうろついてくる！」

といつて私は家を出た。もう我慢が出来ず、宿題というものから解放されたかった。そして今、電車の中です。ガタンゴトンと音を鳴らして、電車は進んでいった。特に行先も決まっていないのに・・・。

私は五番目の駅で降りた。この街は人がよく集まるところだった（よく遊びに来る場所といった方が正確だろうか）。そして私は足を進めた。

一人でこんな大きな街をうろついたのは初めてだった。必ず私の隣には誰かがいた。

「一人つていうのも寂しいものだなー」

そう思いながら通りすがりの公園へ立ち寄つた。私はブランコに座りゆづくりと漕いた。

「あれ？ 雪？」

「へ？」

私の目の前には、二十歳くらいの男の人人が立つていた。彼は私のことを知つているようだ。

「えつと・・・」

「忘れた？ 佐藤だよ、佐藤春樹！ 小さい頃、お前と隆と良く遊んだんだけど」

私は小さい頃の時の思い出を走馬灯のよつに駆け巡らせた。

「も、もしかして春君！？」

「あ、思い出した？変わつてねーな、ははは」

「そりいえば小さい頃、あれは幼稚園だつただろ？か、私は隆と五つ離れた春君とで遊んでいた記憶がある。春君も幼馴染のような人だつた。家は少し離れていたが小さい頃よく遊んでいた覚えがある。だけど、春君は他県の中学校に通うことになり、私達の前から姿を消した。

春君は私の隣のブランコに座つた。

「どうしてここにいるの？」

「いや、戻つてきたんだよ。仕事の都合で」

「そりだつたんだ！帰つてきてるんだつたら私の家に寄つてくれればよかつたのに！」

「それがさ、すっかり忘れててさ。今度連れてつてよ」

「うん！」

そして私は、久々に再会した春君を家に案内することになつた。

## 第7話 やつと夏休みになりました（後書き）

夏休みに突入しました。海に行つたり、花火大会へ行つたり、いい青春ですね。

そして！ついに新登場人物、佐藤春樹が現れましたー！やつと春君誕生です（笑）

引き続き「幼馴染との恋は無理ですか？」をよろしくお願ひします。

## 第8話 海へ行きます

春君と会つた次の日、私は春君を自分の家に案内した。

「おー、懐かしい！」

「さ、入つて入つて！」

私は春君を家に入れた。するとお母さんが玄関に駆け寄ってきた。  
「春樹君！お久しぶり！大きくなつたわねー、さあさあ入つて」  
久々の感覚だつた。春君が私の家に上がつてきてお母さんがジュー  
スを出したりしていた。そんな光景が私の頭を駆け巡つていた。  
「隆は隣の家だつたよな？後で行つて見るか」

「うん！私も一緒に行く！」

「もう雪つたら・・・この子変わつてないでしょー、あの頃も春樹  
君にべつたりくつついていたわね」

そう、私はあの小さい頃も春君にべつたりだつた。お兄ちゃんつて  
感覚もあつて、それに好きな人でもあつたから・・・今でもその  
感覚は消えてはいない。でも今は憧れという感じだろうか。

「よし、それじゃあ、隆のところにも行くか」

「うん！」

そして私と春君は一緒に隆矢の家を訪ねた。

「へい？・・・え、誰？え、何、雪？え？」

「あー、隆まで忘れてる。佐藤春樹、小さい頃よく遊んだろ？」

「ほら、春君だよ！五つ離れてた！」

すると隆矢の顔が思い出したと言わんばかりの驚いた顔になつた。

「春樹か！あー、あの・・・いや、変わりすぎてわからなかつた  
わ・・・」

「隆も変わつたな、男になつたんだな・・・でも相変わらず俺のこ  
と呼び捨てなんだな」

確かにあの小さい頃に比べたら私も含め、三人とも成長している。

春君は永いこと会つていなかつたからよけいにそう思えた。それに

春君はイケメンだし、優しいし、運動神経もいいし……、あの頃は本当に好きだった。

「……だったらなんだし、とにかく入れよ」

「そうだね」

そして私と春君は隆矢の家にお邪魔した。すぐに隆矢の部屋に案内され、昔の話をいっぱいした。

「懐かしい」

「あ、今度さ、花火大会あるだろ？ それ三人で行かね？」

「うん！ 行く！ うわー、楽しみ！」

「隆も行くだろ？」

そう聞くと隆矢は少し不貞腐れた顔をした。

「二人で行つて来れば？」

「じゃあ、春君と二人で行く！」

「俺はいいけど……隆、本当にそれでいいのか？ 俺が雪に何しようとお前はいいんだな？」

何しようと？ 私は一人の会話がよくわからなかつた。

「あー、もういいよ！ 行くよ！ 行けばいいんだろ？」

三人で花火大会に行くことになった。その前に海に行くことになっているのだが。

輝く水面、今、私は海に来ています。

「うわー！ 級麗！ みてみてリナポン！」

「うん、見てます、見てますよ雪さん！ ほら、松田君達もはやく！」 リナポンと隆矢と富口君、そして私の計四人で海に来た。女子群といつても私とリナポンだけ大はしゃぎをしていた。富口君はなんとなく苦笑いつぽいが、隆矢はひとつも笑っていない。

「隆矢、楽しくないの？」

「……誰のせいだと思ってんだよ！ 朝の四時に起こされでお前のテンションに付き合つてやつたこつちの身にもなれよ！ こつちは眠

たいんだよ！お前はどうしてそんな元気なんだ・・・

「だつて、この日を待ちに待つてたんだもん！」

そういうと隆矢は呆れたような顔をして、浜辺に座った。私がリナポンの方を見るとリナポンは宮口君と何かを話しているみたいだつた。

「何話してるの？」

割り込んでいくと、リナポンは驚き

「な、なんでもないよ！さ、行こうか！」

といった。とても怪しい。何か企んでいるのではないだろうかと思えるくらい怪しい。と思いながらも有意義な時間を過ごした。海を満喫した後はやっぱりアイスを食べないと。

「ねえねえ、アイス買いに行かない？」

「そうだね！やっぱり海の後はアイスだよねー！」

私達はアイスを買いにいった。

「ストロベリーアイス二つと・・・隆矢達は何にする？」

「俺はバーラで、隆はチョコで」

「はー？何勝手に決めてんだよーまあ、いいけど

そしてそれぞれアイスを手に持つて、ベンチに座つて食べた。

「隆矢、隆矢のアイス一口ちょうだい！」

そういうつて私は隆矢のチョコアイスを一口食べた。

「な！お前！勝手に食べやがって！」

「ん~、美味しい！」

「松田君、それ食べたら関節キス・・・」

リナポンが地雷を踏んだ。しばらくの沈黙。溶けて垂れしていくアイ

スクリーム。私はこの沈黙を何とか立ち去りたいと思つた。

「わ、私のと変える？私まだ一口も食べてないし・・・

すると隆矢がこちらを睨んできた。

「誰のせいだと思ってんだよ！」

隆矢はチョコアイスを私に渡し、呆れたような顔をした。

「俺、いらねーから雪はそのアイス二つを絶対完食するつてことで

「お腹壊しちゃうよ・・・」

「いーから食えーお前のせいなんだからな！」

無理矢理アイスクリームを食べさせられ、呆気なくお腹を壊すはめになつた。

「お、お腹痛い・・・」

「いいざまだ」

「うわ、隆・・・か弱い女の子にそんな・・・」

「は?どこがか弱い女の子?」

「ムカつく!神様、この男、ムカつきます!海を満喫できたと思つたのだけれど、最後は苦で終わつてしまつた。それもこれも隆矢のせいだ!アイスクリームを二つも食べさせだからだ!」

電車に揺られながら、私はお腹を押さえ、うすくま蹲つていた。電車が駅に着き、私と隆矢は同じ駅で降り、リナポンと宮口君は後三つ目の駅で降りることになつていて。

「松田君ー雪をちゃんと家まで送つてあげてね!」

「石川を泣かせたりするなよー」

「つッせ!」

私は隆矢よりも先に家へと足を進めた。お腹を温めるため、早く家に帰りたい一心だつた。

「あー・・・痛い・・・」

「お前が無茶食いするから・・・」

私は隆矢を睨んだ。といつよりあの時の睨み返しと言つても過言ではない。

「別にこんなの平氣だしーじゃあ、わよひなうー。」

そういうつて家へと走つて帰つた。

## 第9話 もし・・・

次の日、お腹の痛みも無くなり、私は浴衣を探していた。

「お母さんー私の浴衣は？」

「え？ そこらへんにあるでしょー！ 良く探しなさい」

良く探しても無いから聞いているのだが、と思いながら私はタンスの中にしまってある服を必死でかき分けながら浴衣を探した。今度は、春君と一緒に花火を見に行くことになつていて。あ、隆矢も。だからこそ浴衣を着て女の子っぽく決めて行きたいと思っていた。かき分けていつているとピンク色の浴衣らしきモノが見えた。掘り出してみると予想通り浴衣だった。もしかすると小さくなつてしまつたのではないかという不安がある。

「あつたー！」

突然家のチャイムがなつた。お母さんが玄関に向かう音が聞こえる。「ゆきー！ 隆矢君が来たわよー！」

「え？ 隆矢？」

もしかすると昨日のこと・・・、根に持つすぎもウザイ。隆矢は当然のように入つてきた。

「なんでしょうか？ 私に何が用でも？」

「なんだよ、その言い方！ 心配して来てやつたのに！」

心配？ もしかして昨日のお腹が痛くなつたこと？ 隆矢がそのくらいで家を訪ねてくるとは思えないのだけれど・・・。そこまで隆矢に心配されるのも少し屈辱。

「別に平氣だつて言つたじやん！」

「強がるなよ！ お前実際、超超超ちょー弱い人間の癖に」

「そんなんに弱くない！ 別に強がつてなんかいないし！ そんな嫌味言ひに来る暇があるんだつたら宿題したら？ 花火大会行けなくなつちやつてもいいの？」

するとお母さんがジュースとお菓子を持って部屋に入つてきた。

「本当に可愛くない子なんだから。隆矢君こんなにイケメンなのにね~、こんな子が幼馴染だつたら周りから笑われるでしょ?ごめんなさいね~」

「いえいえ、いつも笑われてますから。あははははムカつく。いつもいつもこんな口喧嘩ばつかりしているのにどうして絶交にならないのか不思議でならない。といつか、隆矢のどこがイケメンなのやら・・・。

隆矢が帰った後、私は浴衣にアイロンをして、ハンガーに浴衣をかけた。

「よし!準備オッケー!」

これで花火大会に行く準備が整つた。そういえば春君のメールアドレスも電話番号も知らない。今度会つた時に聞こう。

セミの鳴き声が聞こえる。扇風機に当たつているのに汗をかいている。夏は暑い。猛暑だ。夏は毎日が猛暑だ。そして今、私はとてもなく暇です。

あと少しで花火大会!と思つてもそのあと少しがとても長い。果てしなく長い。

「暇だー・・・」

私はベッドにダイブし、いつの間にか眠りについていた。

あれ、ここ・・・どこだらう?

「おーー!」

返事をしても返つてこない。周り全てが真つ暗。私一人ぼっち。ブラックホールの中はこんな感じなのだろうか。一人で暗い中を駆け走る。ずっと走り続けても景色は変わらない。私一人だけ。

「おーー、誰かー」

「雪!」

すると隆矢の声が聞こえた。だが、周りは真つ暗で何も見えない。

「隆矢?どこにいるの?」

「雪！」

私は三百六十度回転する。だが、誰もいない。すると突然眩しい光が差した。

「雪！」

ハツと田を開けると、田の前には隆矢がいた。

「・・・夢か」

さつきの真つ暗な光景はなんだつたのだろうか。周りに誰もいない、そんな世界だつた。

「雪、大丈夫か？唸つてたぞ？」

「うん、大丈夫・・・ってなんで隆矢がいるの？」

「いやー、暇で暇で」

「宿題は？」

隆矢の顔は一変する。宿題は終わつていないよつだ。もちろんこの私は終わつている。花火大会のために全てを終わらせたのだ。

そしてしばらく沈黙が流れた。私はベッドに寝転がつたまま、隆矢は扇風機に当たりながら優雅に過ごしているのにどこか虚しい。

「なあ、雪・・・」

「ん？何？」

「俺がさ、好きな子に告白したらどうする？」

「え？何、いきなり・・・告白でもするの？」

隆矢の顔はわりと真剣だった。私は体を起こし、ベッドに座りなおす。

「花火大会の日までにしたいと思ってる」

「へへ・・・私はどうするも何も隆矢のこと応援するよ！だつてその人の進境とか気になるし！」

すると隆矢は黙り込んでしまつた。そしてまた沈黙。今日はヤケに口数が少ない。

「俺がもし、雪を好きだつて言つたらどうする？」

「・・・え？何を言つているのだろうか、このお方は。例えばのことだよね？“もし”って言つたし・・・。

「もし隆矢が私を好きなら……私はこのままの関係でいたいって思う」

「そつか……じゃあ、俺帰るわ」

「え? どうしたの?」

「じゃあな」

そういうつて隆矢は私の部屋から出て行った。そして玄関の戸が閉まる音がした。

なんだつたのだろう。疑問ばかりが生まれる。もしかして、本当に隆矢が私のことを好きなら、さつきの言葉は禁句だったかもしれない。もしそうだったら……。

私はいつの間にか隆矢の家に向かっていた。まあ、すぐ隣だからそう焦ることも無いだろう。

「あら、雪ちゃん。どうしたの?」

「隆矢は……」

「あら? 隆矢なうさつとき雪ちゃんのところに……」

隆矢は家に戻らず、私の家を出た後、どこかへ出かけてしまったのだ。私は隆矢を追いかけるため駅の方へ向かった。とても、嫌な予感がした。

## 第10話 どうして？

駅に着いた私は一生懸命隆矢の姿を探した。もしかするともう電車に乗つたかもしれない。私はそう思い、電車に乗り込んだ。休日のせいなのか、電車の中は人でいっぱいだつた。「隆矢！」と叫ぶわけにもいかない。私が諦めようとした時だつた。電車の中で携帯電話がなつた。マナーの悪い人だと最初はそう思つた。だが、この着信音は隆矢の・・・。私は隆矢はこの電車の中にいると確信した。そして一つ目の駅に着いた。すると着信音が消えた。私は隆矢が降りたのだと思い、この駅で降りた。

周りを見渡すが、隆矢らしき人は見当たらない。私は駅を出ながら隆矢を探した。

「隆矢・・・」

百八十七センチメートルの巨大な男・・・。すぐに見当たるはずなのに・・・。私は駅周辺を見回つた。すると曲がり角を曲がる隆矢の姿を発見した。百メートルくらい離れている。私は走つた。

「隆矢！」

曲がり角を曲がつた。だが、そこに隆矢の姿は無かつた。あの時の夢のようだ。周りに誰もいない。隆矢の声がするのに、隆矢は私のそばにはいない。もし、隆矢が私のそばからいなくなつて、一度と会えなくなつたらどうなるのだろう。私にとつて隆矢は掛け替えの無い存在なのだ。

「隆矢・・・」

「雪？何してんだ？こんなところで」

目の前にいたのは、隆矢だつた。私は啞然とした。

「あ、あれ・・・隆矢、さつき・・・」

「え、何？ストーカー？」

隆矢がいることに安心したのか、私は涙が出てきた。

「何泣いてんだよ」

「隆矢が、隆矢がいなくなつちゃつたって思つて・・・追いかけてきて、それで・・・隆矢見つけたと思つたらいなくなつちゃつて・・・もし、隆矢がいなくなつたら、私・・・」

すると隆矢は私を抱き寄せた。こういうときだけ、隆矢はとても優しい。だから今までずっと口喧嘩しても絶交しなかつたのだと思う。「泣くな・・・、そんなブサイクな顔、他人に見せられないだろ？俺は、お前のそばから離れたりしないから・・・、ずっとそばにいてやる」

どうしてだろう。どうして隆矢はこういうときだけ優しいのだろう。私が辛くて悲しい時、いつもそばにいてくれるのは隆矢だった。さすが幼馴染というものだ。

あの後、隆矢と少し街を歩いて家に帰つた。

「ねえねえ、なんであの時、突然私の部屋から出て行つたの？」  
「え、あー・・・、お前には関係ないことだ！ 気にするな！」  
「ひど！ 別にいいじゃん！ だから心配して追いかけてきたのに！」  
「へゝそんなに俺が恋しかつたと？」

「そ、そんなんじやないもん！ ホント、ムカつく！」

でも嬉しかつた。あの時、隆矢が現れてくれて・・・。もしあのまま隆矢に会えないままだったら、どんな複雑な気持ちでいればよかつたのやら・・・。

「あ〜、それにしても明日も明後日も暇だーー花火大会は来週だし・

・・・

確かに・・・。待ち遠しい。春君にも早く会いたい。春君に会おうと思つてもメールアドレスも知らないし、それにきっと仕事で忙しいであろう。夏休みといつても春君は社会人だ。もちろん仕事もしている。でも何の仕事をしているかはしらない。まあ、それもこれも花火大会に聞けばいいことなのだが。

「そういえば、雪つて春樹のどこが好きなんだ？」

「えっとカツ」「イイところと優しいところと頭いいところ、運動神経いいところ、っていうか全部好き！でも今はわかんない。好きつていうより憧れ？つて感じ」

「へー、じゃあ俺はどんな感じ？」

「隆矢は・・・バカ、アホ、ムカつくし、虫以下」

「え、ひどくね？」

「だけど・・・私が泣いてる時、優しくしてくれる男の子って感じ！」

初めて、口にしていつたかもしない。今日はもしかすると特別な日だったかもしれないから。

隆矢の顔を見ると赤面になつていた。

「何照れてるの？やつぱバカだ！」

「は？誰がだよ！」

「隆矢が」

こんな口喧嘩の日々でもいい。楽しかつたらそれでいい。隆矢と一緒にいれるならそれでいい。私はそう思った。最近、こんなことばかり思つていて。高校生になつて精神も変わつたのだろうか。

家に帰つたのは夕方だった。

「ただいまー」

「おかえり」

「夕飯出来るから、手洗つてさわつと食べなさい」「はーい」

今日は私の大好きなカレーだ。作るのは嫌いだけど、食べるには好きだ。いつかカレーが自分一人の力で作れるようになればいいなと思っている。カレーは簡単ですぐ食べられるというが、簡単と思えるのは主婦の人だけであろう。私にとつてカレーは難関な食べ物だと思っている。

手を洗い終え、リビングに足を進めた。すでにカレーがテーブルの

上に置かれていた。

「いつただきまーす」

スプーンを手に取り、カレーを口いっぱいに入れた。

今日のカレーはとても最高に美味しく感じた。

## 第1-1話 花火の音と供に

華やかに着こなす浴衣に、可愛く決めた髪形。

「隆矢、どう？」

待ちに待つた花火大会の日です。

春君から電話があり、祭りが開かれる神社の前で午後七時に待つて  
いるといつて。そして今、午後六時。浴衣を着て準備を始めて  
いた。

「かわいいんじゃね？」

「何その言い方！春君どう思うかな・・・あ、ドキドキする  
乙女ってやつ？」

隆矢のことは無視をして・・・でもあの時のことは忘れない。  
頭の中から離れない。優しく抱き寄せてくれた、あの温かさ・・・。

「よし！時間もちょうどいい感じだし、もう行く？」

「ああ、そうだな」

そして私は隆矢と一緒に家を出た。

「いってきまーす」

六時四十分。電車に乗り込んだ。電車の中は浴衣を着た人やカップ  
ルが多く乗っていた。突然電車が激しく揺れ、私は姿勢を崩した。  
すると隆矢が私を引き寄せてきた。

「危ねえ・・・、気をつけろ」

こういう優しさのときだけかっこよく見えてしまう。

「ありがと」

隆矢は知恵にこんなことをしてきたのだろうか。やっぱり、彼女に  
対する態度の方がもっともっと優しいはずだ。私なんて下種中の下  
種ですからね。

「降りるぞ」

電車が目的地についた。ここから神社まで約五分でつくことになっ  
ている。

「間に合うかな？」

「まあ、間に合わなくても待たせておけばいい」「ひど！そんなことができないよ…せ、早く行くよ…」

そういうて私は隆矢より一步先を歩いた。

神社の前に着くと既に春君は着ていた。

「あ、春君！」

「お、来た来た」

私は春君に大きく手を振つて、駆け寄つていった。隆矢はゆっくりと亀のようになじらにやつてくる。なんだか隆矢は春君のことが嫌いなように見える。

「よし、行くか」

「うん！」

私は春君の隣を歩く。隆矢は私達と少し離れて歩いた。花火が上がるまで私達は屋台を満喫していた。金魚すくい、リンゴ飴、射的、輪投げなどいろいろ・・・。やっぱり金魚すくいが一番定番だらう。

「あー、ヨーヨーすくいしようよ…」

「雪の精神はまだ小さい頃のまんまだな」

「そんなことないよ、ちゃんと着々と大人の階段を上つてるよ」

そんなことを言いながら、ヨーヨーすくいをした。なかなかすくうことが出来ない。

「とれた」

と言つたのは隆矢だつた。隆矢は前から“すくい系だけ”はとても上手い。

「すごーー！」

「・・・やるよ、俺いらねーし」

「ほんと…？ありがと…」

私は隆矢からヨーヨーを受け取つた。水が弾ける音、なんともいえなくくらい夏つぼさを感じさせてくれる。やっぱり、夏は祭りに来なくては…

「・・・そろそろだな、花火」

「あ、だつたらいつもの場所行こうよ！」

隆矢と毎年来ている絶景の場所。私は春君を案内した。

「ほへ、ここなら良く見えそうだな」

すると一発の花火が上がる音がした。花火は綺麗に夜空を照らした。

去年と同様、絶景スポットだ。

「綺麗だね、やっぱり花火は最高だよ！」

「あ、俺ちょっとトイレ

そういうと春君はトイレに駆け足で向かつた。すると次は隆矢の携帯が鳴つた。

「誰から？」

「え・・・あ、いや、春樹が・・・友達見つけたからちょっと一緒に遊んでくる。絶対戻るからってメール」

「そつか・・・残念だね、一緒に見れなくて」

私と隆矢しばらく一人で花火を眺めていた。鳴り止まない花火の音、綺麗に咲く光。とても綺麗だ。

「なあ、雪」

「ん？」

花火の音で今にもかき消されそうな声。

「・・・だ」

「え? 何?」

案の定、花火の音で隆矢の声が聞こえない。私は隆矢に耳を近づけ、集中した。

「好きだ」

「・・・。気のせいだらうか。花火の音で少し声が歪んだのだらうか。私はそう考えた。

「今、好きだつていつた?」

「言つた」

「誰のことが?」

「雪のことが」

聞き間違いではないようだ。でも“好き”にもいろいろな好きがあ

るだろう。

「幼馴染として？」

「・・・いや」

すると突然隆矢が私にキスをしてきた。私はすぐに隆矢から離れ、口を手で覆つた。何が起つたのかよくわからない。どうして隆矢がいきなりキスなんて・・・。

「りゅ、隆矢の好きな人つて・・・」

「雪、好きだ」

時が止まつたみたいだつた。花火の音も耳に入つてこなくなるくらい・・・。

## 第1-2話 そばについてほしいの・・・

花火の光、音が聞こえなくなるくらい・・・。

“雪、好きだ”

夏休み、花火大会の日、私は隆矢に告白されました。その後、タイミング悪く春君が戻ってきた。私と隆矢が不自然なことを察して、春君はどこかへ行こうとしたが私が引きとめた。ここで隆矢と二人きりになつたら、沈黙が続くし、話しかけられない。間に誰かが入つてくれないと関係が壊れそうな気がしたから・・・。夏休みも終わりに近づいてきた。あれから私と隆矢は一度も話していない。もしかするとこのままずっと話しもできず・・・。

結局、花火大会の後から隆矢と一度も話す機会はなかつた。いつの間にか一学期になつていて。一学期に入つて、隆矢と話す機会がまったくくなつた。そうしてみると文化祭の時期がやつてきた。私のところはお化け屋敷をすることになつた。隆矢は実行委員になり、話す機会はどんどん少なくなつていつた。

「ねえねえ、雪」

「ん? 何、リナポン?」

「最近さ、雪と松田君が話してるとこ見てないんだけど・・・。喧嘩でもしたの?」

「う、ううん・・・。喧嘩というより・・・」

リナポンには説明しようと思つた。夏休みの花火大会で隆矢に告白されて、それからずっと口を利いていないと・・・。

「ええええええええええええええ！」

「シー！」

驚いたのはこっちのほうだ。いきなり大きな声で驚かれて・・・、まあ、驚くのも無理は無いであろう。

「え、で？返事はしないの？」

「う、うん・・・する機会がなくて・・・」

「ふ～ん・・・って言ってられないね・・・」

するとリナポンが何かに閃いたようだ。

「松田君！放課後、雪が話しあるつてー！」

「ちょっと・・・！」

私はリナポンを止めようとしたしながらも、隆矢の反応が気になり隆矢を見た。

「あー、うん・・・」

やつぱり迷惑だつたかもしない。隆矢はいろいろと忙しいし・・・。でもリナポンがせつかく作ってくれた機会なのだ。これを利用しなければ、もう、二度と隆矢に返事を返してあげられないかもしない。でも返事といつてもなんて返すつもりなんだ。私も好きですか？本当に私は隆矢のことが好きなのか？かといって嫌いなわけでもない。隆矢と付き合うとかそういう関係になることが、良く分からぬのかもしない。

「じゃあ、雪、頑張つてね！」

そうしてあつという間に放課後。私は自分の席に座つて隆矢を待つた。隆矢は文化祭の実行委員だから、先生に捕まっている。いつの間にか私は寝てしまつたみたいだ。

「あ、起きた・・・」

目を開けると、目の前に隆矢の顔が合つた。私は顔が熱くなるのがわかつた。こんなふうに隆矢を見たことなんて一度も無かつたから・・・。

「そんな顔すんな・・・」

すると隆矢は私に背を向けて、窓の外を見た。教室は、私と隆矢の二人だけ。

「ごめんね・・・」

涙が出てきた。どうしてだろう。

「それってどういう意味？今まで俺を避けてきたごめん？今まで俺

の悪口言つてた「ごめん? それとも……俺の告白は受け取れないの「ごめん?」

何も言い返せない。隆矢のことは好きだけど、でも好きの意味がきっと違うよ……。

「隆矢……私……」

「忘れて。雪は、俺のことを恋愛対象として見たことないだろ? こままずっと幼馴染のままでいたいんだろ? だから、俺が告つたことは忘れていいから……じゃあな」

ちが……わないと? 隆矢の言つてることで合つてるんだよね?

“後悔しないようにね”

「隆矢! 待つて!」

私は、ずっと隆矢に彼女を作らせてあげたいと思つて努力してきた。でも知恵と別れて、私はホツとしていた。それは隆矢がどこかへ行つちゃうような、そんな気が消えたからじゃないの? 私は、隆矢にそばにいてほしいって思つたんじゃないの? あの時、ヤキモチやいていたのは私のほうだったんだ。

「隆矢! ごめん!」

「だから、もういいって」

「だけど、そばにいてほしいの……。隆矢を恋愛対象として見れないかもしれない……。だけど、それでも、私のそばにいてほしいの……。隆矢が私のそばから離れちゃうのは嫌……」

すると隆矢は私の方へ近づいてきて、私を抱き寄せた。

「俺、意外と一途だから、雪が俺を好きになるまで俺は雪をずっと好きでいる……」

どうしてそんなに優しいんだろうつて……。優しいというより、愛? 愛なんて言い方はおかしいかもしれない。幼馴染つて辛いね……。

## 第13話 文化祭です

文化祭当日。

「ゆきー！」

「お、リナポン・・・」

声的にはリナポンだったのだが、お化けの変装をしていてリナポンなのがよくわからない。それに地味に怖い、地味に。衣装を脱ぐと中身はやはりリナポンだった。

「どうどう？似合つてる？」

「うん、似合つてるとと思う」

似合つてるとどうかは、はつきりって顔が隠れているためよくわからない。誰がしても同じことだと思う。なんて本音は言えるわけ無いので、お世辞。

「あ、松田君！これどうどう？」

「おー、いいじゃーん。衣装間に合つたんだな」

衣装を作るのは女子の役目だった。かなりの時間を費やしたがなんとか間に合つことができた。隆矢とは少しだけ仲を取り戻したけれど、まだまだ昔のように長話はできなくなっていた。まあ、文化祭の準備やらで隆矢も忙しかった。実行委員もあるし、周りからも親しまれていますから、もつと忙しいのだ。

「ねえねえ、雪・・・松田君との仲は戻つたんだよね？」

「うん、まあ、告白は保留みたいになつちやつたけどね」

「え？ どういう意味？」

「なーんでもーもなーい。よし、仕事仕事」

隆矢の優しさで、あの告白は保留になつてしまつたけれど、私の今思っている思いが隆矢には届いたと思う。私も隆矢の気持ちを知ることが出来たし。でもいつかは限界がくるよね？

文化祭が始まつて、私達のお化け屋敷は繁盛した。私は受付係をしていた。

「雪ちゃん、交代」

「あ、知恵。ありがと」

相変わらず、知恵はおどおどしている。でも隆矢と別れてからか、少し強くなつたような気がする。まあ、そう思つてるのは我だけだと思うが……。

「雪、そのへん行ってみる?」

リナポンが私を誘つてきた。私は頷き、リナポンと一緒に他のクラスの出し物を見回つた。

「お~、プラネタリウムだつて。カップル専用つて……あ!見てみて!これ面白そう!」

リナポンが指差したところは、『暗闇ルーム』という意味不明なところだつた。しかも一年生のクラス。それに暗闇ルームで何をしろというのだろうか?

「よし、いつてみよー!」

リナポンに腕を引っ張られ、私は無理矢理中に入れさせられた。

「うわ、真つ暗……」

中は本当に真つ暗で何も見えない。人がどこにいるかもわからない。すると誰かが私にぶつかってきた。

「いた……」

「あ、わりい」

男?声的には男っぽい。私、身長が小さいのに巨人に踏み潰されたら……。

「り、リナポン……?」

返答なし。リナポンはこの暗闇の中を彷徨つてゐるようだ。私は一足早く、ここから出ようとしたがどこが出口かわからない。私はとにかく壁に手を添えて歩くことにした。するとまたもや誰かとぶつかった。

「あ、ごめんなさい」

「あー、真つ暗で何も見えねえ……、何これ?」

あれ、さつきと同じ声。それにこの人、私の頭を触つてくる。物だ

と思つてゐるのだろうか。

「私、人間ですけど」

「あ？え、ちつさー見えないと不便だな・・・」

「小さいとか・・・まあ、確かに見えないと不便ですね」  
するといきなり電氣がついた。私は何が起つたか理解できていない  
ように呆然とした。

「おーい、大丈夫？」

「へ、あ・・・」

私とぶつかつたのは知らない人。まあ、当然か。といつより、かな  
り身長が高い。

「ぶつかつちやつてすみません。でわ」

そういうつて私は教室から出た。教室の外にはリナポンが既にいた。

「あ、きたきた！どうだつた？出会いはありましたかね？」

「いや、ないけど・・・つてここ出会いを作る場所だつたんだ・・・」

「あ～、だめだつたか。松田君とは恋愛対象にはならないつて言つ  
てたからさ・・・」

これこそ、よけいなお節介といつものだろうか。「リナポンのせい  
で無駄な時間を費やした」とも言えるはずも無く、私とリナポンは  
自分のクラスへ戻つた。

「あ、おせーぞ」

そういうつてきたのは隆矢だつた。どうやらもうかなりの時間が経つ  
ていたらしい。そして私は受付の交代らしい。リナポンはまたもお  
化け役を演じなければならなかつた。

いつの間にか日は暮れ、文化祭は終わるのをしていた。この学校  
は仮装行列とかしないのだろうか。文化祭、一日くらい続けてほし  
いものだ。私はそう思う。

文化祭の片付けが終わるとなぜか打ち上げしようといつことにな  
つた。イベントがひとつひとつ終わることに打ち上げするのもなん  
だが、このクラスで打ち上げをするのはこれが初めてなのだ。今回  
はしかたない。だが、これから打ち上げはどんどん増えてくるに違

いなかつた。

打ち上げは、もちろんカラオケ。みんな一人一人歌い、盛り上がり、最後になぜか隆矢にマイクが渡った。

「よしや！明日は休みだから二次会でも行くか！」

おっさんの酒飲みでもないのに二次会。でも学生の二次会もいいかもしれない。カラオケも大盛り上がりで楽しく出来た。このクラスにも慣れてきた。でもまだ、隆矢との関係はどの位置なのかわからなければ、楽しければそれでいい、幸せだったならそれでいい、私はそう思う。

## 第14話 冬休みになりました

季節は冬。雪が降り積もっています。

「うー、寒いね」

「うん、それにあと少しでテストだよ」

「あ・・・あ〜あ、すっかり忘れてたのに〜」

「それ、忘れちゃダメでしょ」

リナポンとの関係は、入学式の時よりもっと深くなつた。ひとつひとつのお会いを大切にしないとね。それにあと少しで冬休みだ。正月もある。まだ、隆矢は私のことを好きでいるのだろうか。

「松田君と富口君ーおはよ〜」

「はよ」「おはよう」

隆矢は相変わらず・・・。まあ、ここは言わないでおこう。かなり寒くなり、生徒のほとんどがコートを着て、マフラーをしている。

「拓海、早く教室行こうぜ・・・寒い・・・」

「はいはい、じゃあまたな」

そういうえ、高校になつたら暖房がついていたんだ。さすが高校だ。中学校には暖房というものがない。これまで三年間耐えてきたのだ。これからは耐えなくて済む。教室に入るとそこは天国のように暖かかつた。逆に教室から出るのが嫌になる。そんな毎日が続いた。

テストもいつも通り無事に終了した。隆矢は残念ながら赤点をとつてしまつたが、私は無事に終えることが出来た。冬休みに入り、寒くて家から出られないのが現状で、リナポンと遊びたいと思っていてもなかなか予定が会うことがなかつた。それに寒いから、外に出たくないというのも現状であつた。

私は遊べない分、リナポンに電話をした。

「あ、リナポン？」

『雪……寒くて、「タツ」から出れない……雪、雪降るかな？』

「……逆ですか？」

『「じめんじめん』

前からそうだった。“雪”といつも前のせいと、冬になるといつも雪（天気の方）が降るから“雪”といつも前でからかわれていた覚えがある。

『あ、そういうえば、松田君とは上手くやつてる？』

「んー……、夏休み入つてから隆矢と一度も会つてないんだよね。……。初詣くらいは一緒に行こつかと思つてるんだけど、隆矢意外とモテルからや・・・」

『今のおうちから誘つときなよ！誰かに奪われちゃうかもよー。』

「でもね、そばにいてくれるつて言つてたし・・・」

『そんなの口だけだよ！男なんてね、他の女に移り変わるのは早いんだからー。』

そうか……。確かにリナポンの言つ通りかもしない。隆矢がずっと私のそばにいてくれるわけではない。他の女に移り変わつたら、私なんていらない存在になるに違ひない。隆矢がそんな長期なわけない！あの人は絶対短期だ！

「よし！今から電話する！じゃあね」

リナポンとの電話を切つた後、私はすぐに隆矢に電話をかけた。

『はい？』

久々に聞く隆矢の声。とても寒そうで細い低い声。

「りゅ、隆矢？あのね・・・は、初詣・・・」

『初詣？何？俺を誘つてんの？』

・・・実際、図星ですよね。私は何も言い返せなかつた。

『まさかの図星？初詣、毎年一緒に行つてんじやん。去年だつて受験祈願で一緒に行つたろ？覚えてねーの？まあ、雪はバカだからな』

「な！隆矢よりマシだよ！赤点野郎！」

『そんなこと言つていいのか？もう一緒に行つてやらねー』

意地悪なところは相変わらず変わらない。でも内心は優しい、はず

なのだ。すると玄関のチャイムが鳴つた。

「あ、誰か来た。じゃあね、またかけなおす」  
私は電話を切り、玄関へと急いだ。

「はーい」

戸を開けると春君が立つていた。

「よつ！暇が出来たからよつたんだけど」

「そつなんだ！寒いでしょ、入つて入つて」

春君とは、あの花火大会以来だ。久々に見るが何も変わった様子はない。

「あれ、おばさんは？」

「あ～、パート。お父さんは仕事。で私は冬休みです」

「なるほど」

どうしてか沈黙が続く。時計の針がカチ・・・カチ・・・と音を立てて鳴るだけ。

「雪、あの時」

玄関のチャイムが鳴つた。私は春君が切り出した話を後にし、玄関へと向かつた。戸を開けると隆矢が立つていた。私は顔が赤くなるのが分かつた。

「誰が来たんだ？電話、かけなおすって言つてたのにかかつて来ないから来て見た」

「お、隆か？」

「あ・・・春樹かよ・・・、お邪魔しまーす」

いつの間にかあの花火大会のメンバーになつていた。

「あ、そういうえば春君、さつき何か言いかけてたよね？」

「あ～、大した事じやないから。気にしないで」

そういうわれ、私は気にしないようにした。三人いるのにも関わらず、沈黙。時計の針の音だけ沈黙を遮つているようだ。すると隆矢の携帯が鳴つた。

「はい？・・・あ～、ごめん、無理。・・・彼女と行くから・・・

うん、ごめん。じゃあな」

「誰から?」

「クラスの女子」

「なんて用?」

「初詣一緒に行こうって。だけど断った」

彼女と行くから……? もしかして隆矢、彼女出来たの? 私と初詣・

・・。

「隆矢、いつの間に彼女出来たの?」

「は? 彼女? んなもんいねーよ」

「え? ならなんで彼女と行くからって・・・」

「あ~、彼女がいるって言つたらだいたい諦めるかなって思つて。それに雪と行く約束だろ?」

「な、なるほど。それつて私が彼女みたいな言い方・・・。」

「それつて雪が彼女みたいだな」と春君。

私が思つていたことを春君がズバリと言い、私の顔は真っ赤になつていく。さつきから変だ。

「二人つて付き合つてないんだ」

「うつせー、お前には関係ねーよ。別に俺は彼女にしていいけど、雪がどう思つてるかわからんねーからどうにかできねーんだよ」

「へ~、それ、告白だな」

冬なのにさつきまで寒かつたのに急に体が熱くなる。

「私! ココア、作つてくるね!」

そういう、私は急ぎ足で台所へ行つた。もう限界だった。顔が熱い。きっと真つ赤だらう。私は三人分のココアを作り、一息ついて隆矢たちがいるリビングへココアを運んだ。

「はい、どうぞ」

「サンキュー」

そういうつて隆矢は一口飲むと真剣な顔で私にこういった。

「雪、嫌なら嫌つてちゃんと言え。俺が雪を好きでいて、雪が悲しむなら、俺はもう雪を諦めるから」

そういうつて隆矢はココアを飲み干して、家から出て行つた。

「嫌つて・・・何がよー勝手に怒つてなんでもかんでも！私だつていろいろ考へてるのに！」

「雪？大丈夫？」

春君がいることを忘れて、我を忘れてしまつていた。でも隆矢が言つてゐる意味がわからない。どうしてそんなことをいうの？誰がいつ嫌つて言つたのよ！

「もう、嫌ー隆矢は本当に私が好きなの？あれのビジがよーホント、ムカつく！」

「まあまあ、落ち着け雪。隆矢もあれで雪が大好きなんだ。あいつ昔からそうちだからな・・・」

「知つてるけど、知つてるからムカつくの・・・自分が悪いって分かつてるから・・・」

もうどうしてだろ？高校生になつてからこんなことばかりだ。高校生になつてから隆矢との関係はギクシャクし始めた。

第1-5話　思いは重い（前書き）

決してギャグではありませんので……

## 第15話 思いは重い

大晦日前日、十一月三十日。家のコタツで優雅に温もつていたいけれど、明日は大晦日。いつもだつたら隆矢と一緒に神社へ行つて、カウントダウンをするのだが、今年は無理かもしれないと思うどうしてもジッとしていられない。そして今、隆矢の家の前にいます。私は、勇気を振り絞つて玄関のチャイムを押した。

「はーい」

中から声が聞こえた。玄関の戸が開く。出てきたのは隆矢ママだつた。

「あら、雪ちゃん。隆矢ならまだ寝てるわよ。ごめんね、起きるの遅くて」

「いえ、隆矢が起きるまで待つから」

「だつたら入つて入つて。ココアでいい？」

私は頷き、隆矢ママにさあさあといわんばかりにリビングへと案内された。私と隆矢ママは一緒にコタツの中に入り、世間話をした。いつの間にか私達の小さい頃の話になつていた。

「もう、こんなに大きくなつちゃつて！ 隆矢なんて大きくなりすぎて困るわよ。それにね、隆矢ね、雪ちゃん以外の女の子、家に入れただこと無いのよ。恥ずかしい話だわ、あははは」

そうだつたんだ。初めて知つた。あんなにモテる隆矢が私以外の女の子を家に入れたことないなんて。てつきり知恵とか入れてるのかと思つてた。そんな話をしていると隆矢が二階から降りてきた。

「おはよう、隆矢。雪ちゃん来てるわよ」

すると隆矢は立ち止まり、私を見る。何かいうのかと思つたら、ガン見したのにもかかわらず、無言で洗面所へ行つた。私の脳は怒りマークになつていて。私は隆矢より先回りして、隆矢の部屋で待機することにした。隆矢ママには、ちゃんとココアのお礼を言つた上でだ。

隆矢が部屋の戸を開ける。

「はあ～、何？嫌だつて言いに来たわけ？」

「なんでそうなるわけ？私、嫌とも何も言つて無いじゃん！決め付けないでよ」

何のためにここに来たんだつけ。こんなことを言つたため？隆矢と喧嘩するため？本当は違う。「一緒に初詣行こう」つてその一言だけ言いに来たんじゃないの？

「俺、寝ていい？朝から説教聞きたくない。というか寝たいんですけど」

午前十時。隆矢にしてみれば、まだ午前の六時くらいなのだろう。隆矢は布団に潜り込んだ。私はポツンと一人で座っている。そのうち、私もマニテープルに腕をついて伏せて寝てしまっていた。

俺が目を覚ましたのは一時間後だった。部屋を見渡すと雪がテーブルに腕をついて伏せている。そういうえば昔も雪がこいつやつて寝ていたことがあった。

「・・・隆矢・・・初詣、一緒に・・・行こう・・・」

寝言を言つているのだろう。もしかしてこれを言いに来たのだろうか。

「バー力・・・俺、我慢できなくなるじゃん・・・」

俺は雪の頭をそつと撫でた。いつの間にか俺は雪のことが好きになつていた。昔からよく笑う奴で、その笑顔と優しさに周りの男は雪に引かれていつた。でも雪の裏は泣き虫で強がりだつて俺は知つていた。幼馴染だからこそ分かることだ。そんな雪の全てが俺は好きだ。

「・・・隆矢？」

すると雪が目を覚ました。

「私・・・寝ちゃつたんだ・・・つて隆矢・・・あれ、私何しに来たんだつけ」

惚けてやがる。たぶん初詣のことだろう。惚ける雪も可愛いものだ。

「お前、寝言言つてたぞ。超不細工な発言」

「ぶ、不細工つて私、女の子なんだからね！つていうか、女の子に

不細工なんて言つちやダメだよ！」

「雪、初詣一緒に行こうな」

「え・・・、うん！」

隆矢に先に言われてしまつたけれど、一緒に行く約束が出来てよかつた。寝ちゃう前のことが思い出せないけれど、「初詣一緒に行こう」と言いに来たことだけは確かだ。それに隆矢ともいつも通りになつていて。こうやつて言い合いでいる方がいいのかかもしれない。でもたまには、喧嘩の無い一日もいいと思つ。

「隆矢、私、隆矢のこと好きか分かんないけど、いつか好きになつた日が来たら、真つ先に言いに行くからね。覚悟しておいてよ！」

「は？俺、何十年待たないといけねんだよ」

「そ、そんな何十年もしないうちに決めるもん！」

「へ～、じゃあ、楽しみにしておくか」

こんなドキドキもたまにはあつていいかなつて思う。あの花火大会のときのようにギクシャクしてゐる関係じやなくて、今は軽い感じがいい。隆矢が私を好きでいてくれる思ひは重いかもしれないけど、私はいつかその思ひに答えてあげられるように今は軽くいたい。いつかまた、重くなる日が来るかもしれないけれど、その時は深く考えればいいのだから。

「ねえ、隆矢。隆矢はさ、なんで私が好きなの？」

「・・・单刀直入だな。いつの間にか好きになつてた、以上」

いつの間にか、か。私もいつの間にか隆矢を好きになつているのだろうか。でも幼馴染との恋つて長続きするとは思えない。相手の全てを知つていてるから。他人と付き合うなら、いろいろなことが知りたいつて思つて、もっと好きになつて行くかもしれない。だけど、

幼馴染はその逆。私は隆矢のことを全て知っている。いや、でも全てではないかもしない。隆矢の好きな人を見破れなかつたのも事実。まあ、それは私自身だつたから仕方ないかもしないのだが。私は家に帰り、嬉しさでたまらなかつた。明日が楽しみでしかたなかつた。

## 第16話 雪降る初詣

十一月三十一日。今日は大晦日の日。私は隆矢と一緒に神社へ行くことにした。神社はいつも花火大会でいつているあの神社。

私は朝の十時から、もう出かける準備をしていた。着ていく服、持つていく物、全て整えていた。

「よし！これでオッケー！」

すると携帯電話が鳴った。相手はリナポン。

「もしもし？」

『あ、雪？今日、カウントダウンしに行くよね？』

「うん、隆矢と行くつもりだけど」

『わかった！もしかしたら雪、松田君と喧嘩してて一人でカウントダウンに行くかもって少し思っちゃった。でも安心した、じゃあね！』

そういうて電話は切れた。心配してくれるなんて、ありがたき幸せ。でもリナポンは誰と行くのだろうか。出会つたら話しかければいいことだけれど。

ついに時間が来た。隆矢が私のところへ来てくれることになつている。玄関のチャイムが鳴る。

「いつてきまーす」

玄関を開けると隆矢が寒そうに立つていた。今日は雪が降つていて。私と隆矢は黙々と駅まで歩いた。駅に着き電車に乗る。人が多い。私は身長が低いせいで、押され、なかなか電車に乗ることが出来ない。すると隆矢が私の手を引っ張つて、引き寄せてくれた。

「あ、ありがと・・・」

「俺から離れんな、小さいんだから見えねえだろ」

「大きなお世話！別に大丈夫だもん」

「へへ、じゃあ俺、もう助けてやんない」

前から思つていたが、隆矢はドSなのか！ムカつく発言ばかりだし、いいこと言つた後に余計な一言が混じつてゐるし。まあ、それもこれも昔からなのだが。

電車が着き、私は隆矢の手を借りず、出よつとした。だが、なかなか人が多いせいで押される。

「隆矢……」

なぜか名前を呼んでしまつた。無意識に……。すると隆矢に声が届いたのだろうか、隆矢はまたも私の手を引っ張り、引き寄せてくれた。隆矢はこちらを向いて笑つてくる。

「やっぱ、無理だつたじゃん、だつせ～。神社も人が多いんだから俺から離れるなよ」

「ムカつく……」

ムカつくけど、迷子にならないためにも隆矢から離れないようにしなければ。

神社につくとたくさん的人がいた。

「甘酒……飲みに行くか」

「つ、うん」

隆矢が一步先に進んでいく。その途中、私はいろんな人とぶつかつた。いつの間にか無意識に隆矢の服を掴んでいた。

「え、なに？」

無意識のうちに隆矢の服を掴んでいたことに気付き、私は直ぐに手を離した。

「いや、無意識に、変な意味じやないからねー」

するとまた隆矢は笑つた。

「手、繋いでやろつか？」

「ば、バカにしないで！私だつてね、高校生なんだからねーホント、ムカつく」

「バカにしてねーよ、心配してやつてんの。小さいから

「小さいからいらないでしょ！」

そんなことを言いながら、甘酒を受け取り、温もりを感じる。隆矢と毎年ここに来るのは変わらないけれど、今年はいつもの感じではない。感情がいつもとは違う。それも私達が高校生になつて、隆矢に好きだつて言われたからだと思つ。

「もう少しで新年だ」

十一時五十分。参拝をするところには既に多くの人が並んでいた。私と隆矢も甘酒を飲み干して、参拝をするため後ろへ並んだ。

そして「5、4、3、2、1」と供に年が明けた。

「あけましておめでとう！」やれこめず

「あけおめ～」

「うわ、隆矢軽いよ！」

すると私も隆矢も携帯電話が鳴つた。きっとあけましておめでとうメールに違いない。携帯を開くと予想通り、クラスの人からのあけおめメールだつた。そしてメールを見ているうちに私達に参拝する出番が來た。

私と隆矢は一緒に鐘を鳴らし、一礼と一拍手をした後、手を合わせ、願い事をした。

“いろいろあつた年でしたが、とても楽しかつたです。それと、隆矢のそばにいれますように”

私は願つた後、一礼し隆矢の方を見た。隆矢は念に願いを込めているようだつた。

「何を願つてたの？」

「内緒」

「まあ、言わない方が叶うつて言うからね！」

そんな話をしながら、私達はおみくじを引くことにした。

「あ、大吉だつて！見てみて、隆矢！」

そして隆矢のくじを見ると末吉だつた。なんて微妙な位置。

「す、末吉でもいいじゃん！大丈夫だよ」

「いいよな、雪は。大吉で！」

大切に持つとかなければ。でもおみくじはただの運だ。当たり外れもきつとある。おみくじが全てではない。おみくじは人生に迷った時の道しるべなのだから。

だんだん人も少なくなつてきて、雪も止んだ。

「そろそろ帰るか」

「そうだね」

そうして私達は家へと足を運んだ。帰りの電車は人も少なく、行きとは違い、隆矢の手を借りることも無く電車から降りることが出来た。

「今日はありがと、楽しかつた」

「俺も・・・面白かつた」

「まだ、バカにしてるでしょ」

まあ、いつもこんな感じ。あと少しで高校一年生も終わり、一年生になる。隆矢は前からもてていたから、後輩から好かれるだろう。私を好きでいてくれるのは嬉しいけれど、隆矢を困らせるようなことはしたくない。いつか、ずっと幼馴染でいたいと言つしかないのだろうか。

## 第17話 チョコに込められた気持ち

年も明け、冬休みも終わり、いつの間にか一月になっていた。もうバレンタインの季節です。

「ねえ、雪。やっぱ松田君にあげるの？」

「え？ 何を？」

「惚けちゃって・・・チョコだよ！ バレンタインチョコ！」

「あ～、そうなるね」

リナポンは呆れたような顔をした。毎年あげているバレンタインチョコ。もちろん義理、というより日頃のお礼のようなものだ。

「きっと松田君、いろんな女子から貰うんだろうな～」

「だらうね。中学の時、持ちきれないくらいのチョコ貰つてたよ。でも、隆矢さ・・・本命だけは貰わなかつたんだよね。告白されて受け取つてつて言われたら、ごめんつていつも言つてた」「うわ～、勿体無い。まあ、松田君、女より取り見取りだよね」どうして断つていたんだろうって今さら分かる。私のせいだつたことに。それに私より可愛い女の子いつぱいいたはずなのに、その中でどうして私だつたんだろうって思う。

「あ、松田君と富口君、おはよ～」

リナポンが一人に駆け寄つてこぐ。私はゆつくりとリナポンのあとをついていく。

教室に入るといつもと変わらない風景。でも、女子の反応が少し変わつているような気もする。さすがに好きな人に告白するチャンスがあと少しで来ると思つと、興奮も止まらないであらう。

「雪、バレンタインの前日、一緒に手作りチョコ作ろうね

「オッケー」

リナポンは誰にあげるのだろうか。そういうえば、リナポンは謎だ。好きな人とか聞いたことないし、新年の時、誰と一緒にいたのかも知らない。バレンタインチョコも誰にあげるのかわからない。また

今度聞い「う」と思つていても、いつも忘れてしまつていて聞けてない。

「ねえ、リナポン。リナポンは誰にあげるの？」

「ヒ・ミ・ツ」

「・・・」

結局聞いても内緒か。期待して損してしまつた。でもそんなりナポンだからこそ、悪い部分も良い部分も見つけられてきたと思つ。

そしてバレンタイン前日。私とリナポンは手作りチョコを作るこ  
とになつた。場所は、私の家。

「よし！作るよ！」

そうして作業に取り掛かつた。チョコを細かく切つて溶かし、いろ  
いろ間違つたりもして一時間が過ぎた。

「で、できたー！」

仕上がりはなぜかハート型だつた。

「え・・・ちょっと」

「これが家族ので、このハート型のが松田君の！」

「え！ハートとかあげたことないんだけど」

「いいじゃん、たまには！はい、包んで包んで」

そういうながらも私はチョコを袋に入れ、リボンで結んだ。

「よし、明日持つて行くだけだね」

「うん」

翌日。さすがに朝渡すのはどうかと思い、チョコを持つてリナポンのいる駅に向かつた。学校につくまでずっとバレンタインデーの話ばかりだつた。

「あ、松田君と富口君・・・」

二人のもとに駆け寄つていく女子。チョコを持つている。もちろん友達感覚のチョコが多いだらう。この時点では。でもこれから本命

チョコを渡してくる人が増える。隆矢と富口君の周りが大人しくなつたところでリナポンは一人に駆け寄り、チョコを渡した。隆矢は先に教室に行つてしまい渡す機会を失つてしまつたが、富口君だけには一応渡しておいた。

教室に入ると甘い匂いが漂つていた。

「あ、雪ちゃん、莉奈ちゃん！ はい、これ」

知恵が私達に駆け寄つて渡してくれたものはチョコだつた。これが友チョコという名のチョコだ。

「ありがと」

いつの間にか時は過ぎ、放課後に・・・。教室には甘い匂いが漂つてゐる。

「隆！ 呼んでるぞ」

「あ？」

私の耳に聞こえてきた。教室の前には可愛らしい女の子が立つている。私は直ぐに分かつた。隆矢に告白する女の子だなつてことが。

「ねえ、雪。ちょっと見てみよ」

「え！ ちょっと・・・」

リナポンに引つ張られながらも隆矢と可愛い女の子を追つた。やっぱり本命チョコだ。

「好きです！ これ、受け取つてくださいー！」

「ごめん、無理」

「・・・やつぱり、石川さんのこと好きなんだ。どうして？ 石川さんより可愛い子、他にもいるじゃん！ どうして石川さんなの？」

私が一番聞きたかったこと、あの子が聞いている。私は無我夢中で二人の会話を盗み聞きした。

「俺は、顔とかそんなので選ばない。あいつは、他の女とは違うんだ」

「何が違うの？」

「わかんねーけど、俺、あいつの全部好き。誰にもあいつを渡さない」

「もう少しよつ。こんなにも思つてくれていたなんて知らなかつた……。

「もし、石川さんに好きな人が出来たらどうするの？」

「そんな時は、奪い返す」

「かつこいいこと言つちやつて……。じゃあ、私と友達になつてよ。それならいいでしょ？」

「おう」「うう

感動のシーンだ。私のせいで振られる人がいると思つとじつままで泣けてくる。

「え、雪、どうしたの？」

「なんか……、悲しくて……」

どうしていいかわからない。隆矢のことが嫌いなわけじゃない。でも好きなわけでもない。ただの幼馴染としてしか見れないんだと思う。

私は結局、隆矢に学校でチョコを渡すことはできなかつた。家に帰り、隆矢の分のチョコを私に行こいと決めた。直ぐ近くの家。玄関のチャイムを押す。

「はい？」

玄関の戸が開く。出てきたのは隆矢だつた。

「あ、隆矢……、あのさ……」

「まあ、上げれよ。寒いだろ」

「う、うん」

玄関であげて、直ぐに帰るつもりだつた。だけど、なぜか勇気が出せなくて結局家にあがつてしまつた。隆矢の部屋に案内され、隆矢の部屋はチョコの匂いでいっぱいだつた。机の上にはたくさんのチョコ。こんなにも食べたら、病気になつちやつ。それに私まであげたら……。

「これで、多すぎて食べきれねーんだよ。雪、食べる？」

「食べれないよ……、だって、気持ち込めて作つてくれたチョコじゃん。それに隆矢に向けてあげたチョコなんだから、私が食べち

やつたらかわいそつだよ・・・

「あ～、まあそうだな。で？何しに来たの？」

「え、いや、鼻血出してないか見に来ただけ」

嘘をついてしまった。別に友達感覚であげればいいだけの話。なのにどうしてこんなに躊躇つのだろ？。どうしてこんなに複雑な気持ちになるのだろう。

「俺、期待したじやん。毎年チョコくれてるから、今年もくれるのかなって。つてか、ヤキモチやいた。拓海はさ、雪から貰つてんの俺貰えてないから」

「ほ、本当は！チョコ・・・あげよつと思つて・・・、学校で渡せなかつたから・・・」

そういうつて私は隆矢にチョコを渡した。隆矢は直ぐに袋を開けた。

「・・・なんでハート型なの？」

「いや、それはね、リナポンが勝手に・・・」

「ふうん」

そういうつて隆矢は黙々とチョコを食べた。

「美味しい・・・意外と」

「一言多い」

でもよかつた。チョコを渡すことが出来て。今、私の顔はすごく熱い。冬なのに熱が込み上げてくる。今までこんなことなかつた。隆矢には普通に渡せていた。なのに今年は違う。初詣も今までとは違う感情だつた。やっぱり、私・・・隆矢のことが好きなのかな？

## 第18話 新学期早々です

冬も終わり、春。とうとうクラス替えの時期がやってきました。

「うわ～、どきどきする～」

「リナポン、同じクラスだといいね」

「うんうん」

私とリナポンは靴箱前に貼られてある、クラス表を見た。

「私、B組・・・、あ、雪もだ！」

「よかつた～！」

「あ、松田君達も一緒だよ～。よかつたね」

そうして新学期が始まった。教室に入ると既に隆矢も富口君も来ていた。あまり変わってないような気もする。そして私は自分の席を確認し、座った。リナポンとは席は遠くなってしまったが、同じクラスだつたことが救いだつた。

「はよーっす。お、俺の隣は・・・石川、雪？」

元気の良い奴だ。つて思った矢先、その人が隣だとは・・・。すると彼は私の隣の席に座つた。あれ・・・良く見たらこの人、あの文化祭の時にぶつかってきた人！

「アアアアアアアア！」

お互い指差しながら、はもる。

「あの時の！」

「こんなところで再会するとは・・・」

まさか同級生だつたとはね。あの時はてつきり先輩かと思つていたが・・・。

「えっと、石川雪ちゃんね～。俺、島崎優斗、よろしく～」

「よろしく」

この人も私を小さい呼ばわりした人だ。許せないが、隣の席ということもありながら無視することは出来なかつた。すると先生が「並んで～」と呼びかけた。担任はかわらず、西口小枝子（久々すぎて

わからないかもしれないが）。

始業式も終わり、学級委員も決まり（もちろん隆矢）、いつの間にか放課後。

「雪、帰ろう！」

「うん」

「あ、ちょっと待って、雪ちゃん

ゆ、雪ちゃん？ そう呼び止めたのは、隣の席の島崎優斗。こいつ、意外とチャライです。

「なに？」

「メアド交換しようよ」

だ、だるい絡み！ この輝くようなオーラ。眩しい・・・。私は絡みがだるいので、さっさと済ませるためにメアドを教え、すぐに帰つた。

「雪の隣の人、ちゃらいね～」

「めんどくさいよ・・・」

すると携帯電話が鳴った。メールだ。相手は・・・島崎優斗。

「見なくていいの？」

「あ～、うん」

今年はどんな一年になるのかな。まあ、この島崎つて人がどんな人がまだわからないし。

家に帰り、携帯を開き、島崎からのメールをみた。

“あ、俺俺、島崎優斗！ もしかして俺のこと嫌いになっちゃった？”

好きだった時代がありませんが、と突っ込みたくなるところだがそこは抑えて・・・。なんとも言えない人種だ。返事を返そうとすると玄関のチャイムが鳴った。お母さんは今、買い物に出かけていないし、私が出るしかない。

「はーー」

私が開ける前に玄関の戸が先に開いた。

「隆矢、どうしたの？」

「別に何も用ないけど遊びに来ただけ」

眉間に皺よつてるし。怒つているのだろうか。

「何？怒つてるの？」

「別に怒つてないんですけど」

言い方が怒つているんですけどね。 そうして隆矢はなんの躊躇いも無く私の部屋へと入つていった。

「あ、そういえば、メール・・・」

「誰から？」

「あー、島崎優斗つて人。あの、隣の席の」  
するとよけいに隆矢は眉間に皺を寄せた。

「へへ、もうあいつと仲良くなつたんだな  
もしかして・・・」

「まさか、ヤキモチ？」

隆矢の顔が真つ赤になる。それにつられて私の顔も真つ赤になつた。  
「冗談でもいいから違うつて言つてよ。 図星とか・・・」  
「恥ずかしくなるじゃん」

「だつて、事実だし・・・ヤキモチやいてんの」

「別に大丈夫だよ。あんなチヤラ男好きになつたりしないから」

「じゃあ、俺を安心させろよ・・・」

え、なに？ いきなり隆矢の顔が真剣になつた。 隆矢はどんどん私の方へ近づいてくる。

「隆矢？」

私は後ろへ後ろへ退けていく。最終的にたどり着いたのはベッドだつた。

「俺、安心できねー・・・。雪が他の奴に盗られそうで・・・」

「大丈夫だつて！ ね？ 隆矢。 私を信じてよ」

すると隆矢は私のことを優しく抱き寄せた。もう隆矢にも限界が来ているようだ。

「俺、雪が俺を好きになるまで我慢できねえよ・・・」

こんなに思いが深くなつたのはいつからだろう。 隆矢は今までどれだけ我慢してきたのだろう。 私はどれだけ隆矢に我慢をさせてきた

のだろう。

「隆矢・・・、目瞑つて・・・」

隆矢は言つたとおり、目を瞑つた。別に特別な感情なんて無い。でも、好きの意味が違うかもしれないけど・・・、でもね。

私は隆矢に軽くキスをした。そして直ぐに隆矢に抱き付いた。この赤い顔を見せないように・・・。

「え、ちょ・・・何、今の」

「い、いいから！こうしさせて！今、顔見られたくないから」

「ごめん、見たい・・・」

すると隆矢は無理矢理私の顔を見てきた。私の顔は真っ赤で少し涙を浮かべた顔。

「やべ、めっちゃかわいい」

そういうつて隆矢は私に笑いかけた。やっぱり、好きなのかもしれない。隆矢が・・・好きなのかも。隆矢のそばにいられなくなることが嫌、それは独り占めしたいつてことだよね？どうしてキスなんてしちゃつたの。こんなんだつたら、自分の気持ちが揺らいでしまう・・・。それもこれも自分のせい・・・。

## 第19話 わからない

「雪ちゃん」「

来た。チャラ男！

私が隆矢にキスをしてから数日。私は隆矢と顔を見合すたび、赤面になり顔を背けてきた。相変わらず、チャラ男の島崎優斗は、私に鬱陶しい絡みをしてくる。

「メールの返信も遅いしと、やつぱ、俺のこと嫌い？」

「・・・嫌いかもね~、リナポン行くよ。」

チャラ男は絡むとだるいので、なるべく避けるようにしている。

「はあ~・・・疲れる」

「大丈夫？島君、絡みがだるいよね」

「島君？」

「あー、みんなから島君って呼ばれてるみたいで、釣られて私もみたいな」

島君・・・。そんな可愛い名前をニックネームにしてもうれて、チャラ男君は幸せですね。どうしてみんなチャラ男がみんなから好かれるのか分からぬ。隆矢はまだ明るいし、優しいから分かるけど・・・。

「雪はあんまり島君と関わっちゃダメだよ！雪には松田君がいるんだから！」

「関わりたくないんだけどね・・・」

自分の気持ちもあやふやで、隆矢の気持ちにも答えてあげられていないま、他の男と仲良くするのは自分でもどうかと思う。あの時、隆矢にあんなことをしたのは、隆矢が可愛そだつたからなのかな。自分からキスしておいて、理由はないなんて・・・。

「・・・雪？」

我に返り、リナポンが私を呼んでいたことに気がつく。

「明日、遊べる？」

「うん」

「どうしたの？何かあつた？」

「未だ、リナポンには隆矢にキスしたこと言つていない。

「別に何もないよ」

これはさすがにリナポンにも言えない。今までなんでも相談してきてたが、こればかりは自分で解決したいと思つてはいる。それにこれは私の責任もあるから・・・。

駅に着き、リナポンを送つてから、私は家へと足を進めた。あれから家の近くになると隆矢とばつたり会いたくないので警戒しながら、家に帰つてはいる。そして私は隆矢がいないことを確認し、玄関に猛スピードで走つた。

「雪！」

・・・見つかつてしまつた。後ろを振り向くと隆矢が立つていた。

「どうして・・・」

「雪が俺のこと避けてるの知つてたから、待ち伏せしてた」  
隆矢がどんどん近づいてくる。あの時みたいに・・・私は隆矢の顔を見ることが出来ない、ただ、顔が真つ赤になつていいくことだけわかつた。

「こ、来ないで！近寄らないで！じゃあね！」

そういうつて私は家中へ入つていつた。隆矢は立ち尽くしたままだ。すると隆矢が玄関のドアを無理矢理開けようとしてきた。私はドアを引っ張り、鍵を駆けれるところまで持つていこうとする。だが隆矢のほうが断然力は強い。

「おい！開けろ！失礼すぎるだろ！俺は菌か！」

「やめて！」

そしてついにはドアが開いてしまつた。私は急いで靴を脱いで自分の部屋へ突つ走つた。

「きやあああああ！」

不審者に襲われているかのように隆矢から逃げる。そして私が階段を上がつてはいるところで隆矢に捕まつてしまつた。

「離して！ストーカーじゃないんだから！」

「そりゃあ、ストーカーもするよ！避けられてたら気になるだろ？が！」

「……え、ストーカーしてたの？」

「いや、だから……あん時のこと……が頭から離れねえんだよ……あの時のこと……。私も離れたことは無い。忘れようとしても無理。

「な、なんのこと？覚えてないな～」

「と、惚けやがって！雪が俺にキスして、お前の顔がすげー真っ赤で可愛かった……っていう……」

隆矢の声の音量が小さくなつていつた。私の顔も真っ赤だつたけれど、隆矢の顔の方がもつと真っ赤だ。

「バカ！そんなの大きな声で言わないでよ！恥ずかしいでしょ！」「どうしよう、どうしよう。このまま一人つきりでいたら、耐えられなくなつちゃう。もうどうしていいかわからない。するとなぜか涙が止まらなく出てきた。私は声をあげながら泣く。

「は？なんで泣いてんだよ」

「だつて……隆矢が……、隆矢が好きだけど……好きだけど……よくわかんないんだもん……恋愛感情の好きなのか、わからんないんだもん……」

ハツ！無意識のうちに言つてしまつた。

「い、今のはなんでもない！聞かなかつたことにして！」

私、何を言つているのだろう。隆矢を悩ませないよう言わないようについて思つていたのに、つい言葉に出てしまつた。最悪だ。私が思つてしていることが隆矢にばれてしまふなんて……。

「じゃあ、なんであん時、俺にキスなんかしたわけ？それって好きだからじゃねーの？」

怒つてる。怖い……。

「俺、損した……。期待してた……、あん時、赤くなつた雪の顔見て両思いになつたのかつて思つたけど、そうじやなかつたんだ

な。 そう思つてたのは俺だけだつたつてことか・・・」

隆矢は私から手を離し、無言で家を出て行こうとしている。

「隆矢・・・」

「雪は、あのキャラ男と仲良くすればいいだろー。」

そういう残して、隆矢は家を出て行つた。まさかこんなことになるなんて思つていなかつた。どうしてこんなことになつてしまつのだろ。う。高校生になつてから今まで経験したこと無いことばかり起つる。もう、どうしていいかわかんないよ・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7607x/>

---

幼馴染との恋は無理ですか？

2011年11月9日20時14分発行